

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



第八十二卷第四号  
日本幼稚園協会

4

# フレーベル館の8大月刊誌

58年度は、内容がさらに充実しました。

① - 情操

増頁しました!!

## キンダーブック

年少・年中児向けの絵本で、夢のある心たのしいお話は情操を豊かにし、創造力を高めます。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

② - 観察

## キンダーブック

年長児向けの絵本で、観察の眼を育て心情を豊かにする魅力いっぱいのお観察絵本です。

(ワイド画面) 団体購読価 月250円

## しぜん-キンダーブック③

自然のようすや、その不思議がよくわかるよう編集された好評の科学絵本です。

(上製本) 団体購読価 月300円

## キンダーメルヘン

年少・年中児向けのお話絵本で、「夢とゆとり」が生まれるよう配慮されています。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

キンダー

## おはなしえほん

幼児の心を生き生きと育てる美しく感動的なお話は、繰り返し読んで楽しめます。

(上製本) 団体購読価 月300円

たのしいがくしゅう

## おおぞら

子どもの知的欲求に応えながら、よく考える子、遊び上手な子に育てる絵本です。

(総合絵雑誌) 団体購読価 月300円

## ころころえほん

園生活で初めてふれる、2~3歳児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。

(厚紙製本) 団体購読価 月220円

## 保育専科

増頁しました!!

-今月のカリキュラム-

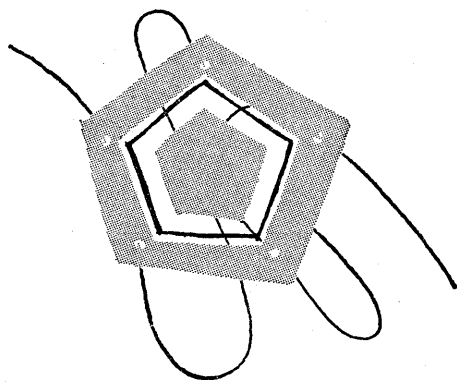
先生方の悩みに応える実践的な保育雑誌です。また別冊は年3回発行いたします。

定価400円 (別冊とも年間7,800円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

# 幼児の教育



第八十二卷 第四号

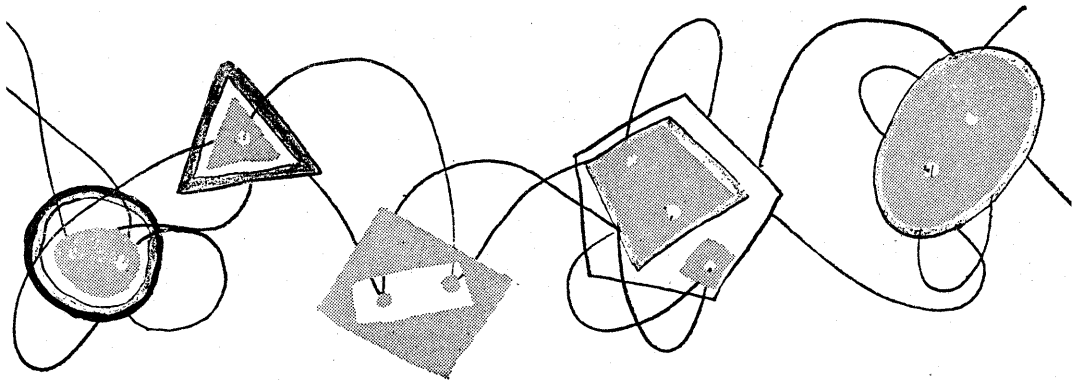
# 幼児の教育目次

—第八十二卷 四月号—

© 1983

日本幼稚園協会

心のつながり・心の充足をこそ……………	清水美智子……………(4)
私の保育……………	樫野弘子……………(7)
私のまわりの子どもたち……………	小畑敏子……………(14)
サギソウの花……………	今井百合江子……………(17)
露草……………	高原典子……………(20)
トロピカル・フラワーズ……………	阿久澤栄太郎……………(22)
私の園の卒園式 余滴……………	堀合文子……………(24)
近代短歌に現われた子ども(九)……………	大塚雅彦……………(26)



ニュージーランドの幼児教育を訪ねて……………松川由紀子…(34)  
 ニュージーランドの幼児教育(一)……………マイケル・クーパー…(38)

木片をつないだ手の記憶……………津守真…(45)

Tくんのこと……………田中三保子…(48)

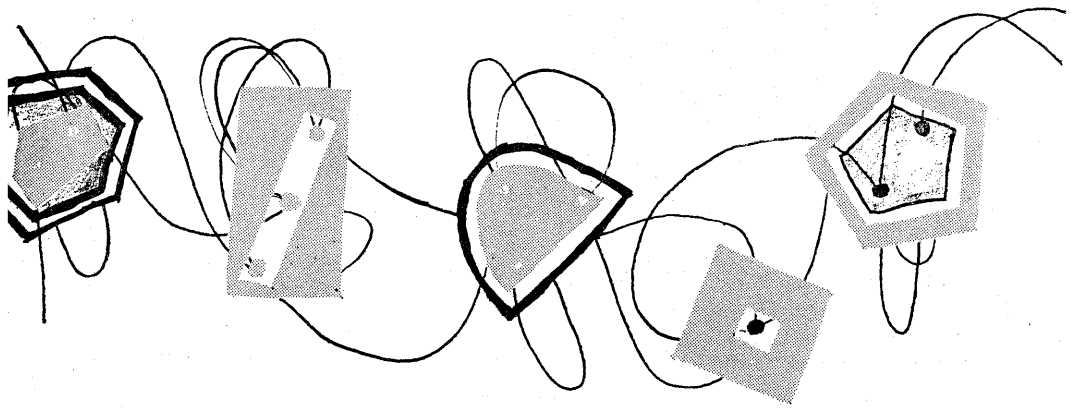
エリクソンと幼児教育(16)……………仁科弥生…(52)

史料紹介

『邦訳 日葡辞書』

——わが国中世の児童文化史研究によせて——……………(61)

表紙 織茂 恭子  
 表紙題字 比田井和子  
 カット 福田 理恵



## 心のつながり・心の充足をこそ

清水 美智子

今からほぼ十年前、保育学年報（一九七一・七二年版）の中で、私は「これからの保育内容」に對する提言をしたことがある。

一九六〇年代は、知識爆発時代、宇宙科学時代の幕明けを騒がれ、教育もこの時代にあつた内容にするべしと、教育の現代化・科学化のかけ声が喧しかった。小・中学校では最先端のことをあれもこれも教えようと教育内容を盛り沢山にした結

果、消化不良の子どもたちが続出するに至つた。

より可能性にとんだ幼児のうちこそ多くのことを学ばせることができると、知的早教育への期待が財界からもよせられて、幼児教育振興策がとられ、就園率は急速に高まっていった。

あの科学化・現代化の過熱現象の中で疑問をもち続けていた幼児教育関係者も少くなかつたと思ふが、私もその一人であつた。その思いが、前記

の提言をした理由でもあった。

やがてあの種のブームはおさまって、小中学校の教育課程もつめこみからゆとりの教育へと転換するに至った。

一体、あの騒ぎは何をもたらしたのか、あの当時の公教育をうけねばならなかった子どもたちの被った損害を、誰が償うのだろうか。

当時乱立した幼稚園は、今出生率の低下から園児が集まらないという現象が出ている。生き残るためには園児集めの目玉商品が必要だとか、あそこでは〇〇の習いごとができる、あの園は保育時間ながい、通園バスがある、給食がある等と、保育観や保育内容ではなく親の手抜きがどれだけできるか、で選ぶ親が多いと嘆いている保育者に会った。

二才から水泳教室に通わせた四才児だが、最近行くのを嫌がるようになった。何級になるまでや

めてはいけないと励ましているものの、これではないのでしょうかという母親の相談を受けたことがある。そういえば、私の近隣でも水泳教室のバスが年中走っていて、幼い子が送り迎えされている。自転車やバイクの荷台に子どもを積んで、幼児体操教室に送り届けている光景も目にする。今は知育以外に、あるいは以前に体力づくりが大切という風潮のようだ。

知育といい、体育といい、いずれも親の役目はお金を出して子どもを「専門家」のところに連れていくことである。経済的に豊かな時代、教育産業の栄える時代の家庭教育の内実に思いが及ぶ。

数少ない子どもとして生まれ大切にされているようでいて、実は手塩にかけてつくしみ育てられるという情感とは縁遠いところにおかれている、今の子どもたちはずい分淋しい思いをしているのではなからうか。外側からみた出来栄え、能

力の高低、学習効率のよさ等に価値をおいて評価する眼に早くから囲まれ、子どもの心は空しくおびえているのではなからうか。

子どもの心が何を求めているのか、本来じっくりつき合いながら育ててくればわかるようになるはずなのだが、最近では外からの刺激が多くて、子どもも親も注意がそらされてしまつてじっくりつき合った経験が乏しい。親はどうやって遊び相手になつたらいいか、つき合い方のわからない不安から、少しでも保育時間の長い園に入れよう、○教室にも通わせようと他人まかせの姿勢により傾く。

こうした背景を考えると、園では子どもとの心のつながりを深める保育を展開してほしい。保育者はひとりの子どもが自分の心の求むるまゝに活動することを認め見守り、そこからうまれてくる

ものを共に味わつてほしい。マイクを通した音声ではなく、子どもと同じ大きさの肉声で語りかけ、子どもの目の高さでうけとめてほしい。子どもには、歩みは遅くとも自分の足で歩きとおせたいような心の充足を味わわせてやりたい。大地と大気に親しみ、四季の移ろいを全身で感じられるような自然とのつき合いを体験させてやりたい。

そして保育参観のやり方を変え、日々交代で二、三人の母親が保育の中に入り、このような子どもで生きる世界を体験してもらい、生まの子どもとつき合う時間を母親の人生にとり戻してもらうように。

現代には、こんな試みも必要なのではないかとさえ思う。  
(大阪教育大学)



# 私の保育



榎野 弘子

大学を卒業して二十余年、私立保育園、共同保育所を経て、現在は横浜市の私立幼稚園に勤めています。この幼稚園は園庭が広く、その上自然の森が続いていて自由に森で遊べます。また山羊が居て、赤ちゃんが生まれたります。その他にも孔雀、兎、モルモット、ちゃぼ等、動物がたくさん居ます。

また、子ども達で畑を耕して、キュウリや赤かぶや苺や大根を植えています。このような自然に恵まれた園な

ので、子ども達はその時期時期に、木苺やいちぢくやさくろやぶどうや栗やあけび等をもいで食べ、虫とりに夢中になります。

今受け持っているのは四歳児ですが、毎朝「今日は一体どんなことが起こるかな」と期待をもって子どもを迎えます。長くこの仕事をすればする程、子どもの素晴しさがわかってきました。子どもはどんな遊びをしていても学習しています。幼児にとって遊びながら学習してい

くことがどんなに大切なことか、ますますわかつてきたこの頃です。子どもの遊んでいる様子をみてしていると遊びを通して成長しているんだな―としみじみ思います。こんな子どもの素晴らしい様子が実感として感じられる場面を、私の日誌から拾ってみます。

小さい家庭用のビニールプールを寄付していただきました。空気を入れてふくらまし、部屋に置きました。それをみてたかひろ君が「ミンナハイレナイ」（クラスは三十二人居ます）と言いました。更に、ちえこ「タクサン集メナイトダメ」　たくや「ソレナラ簡単、ミンナガ少シズツアッ入レレバ」ちえこ「ミンナハイレナイ。ジュンバンコニスレバイイ」　外にある園用の大きいプールと大きさ比べをしたり、小さいプールでみんながはいれるにはどうしたらいいか、真剣に考えています。

長い夏休みが終って二学期が始まりました。夏休み前にはまだほんの小さい実だったいちぢくが大きくなり、ぱっくり口をあけているのをみつけたあい子ちゃん「イ

チヂク、夏休ミスンダカラ、食ベラレルヨウニナツタンダ、ミンナガ食ベラレルヨウニ」　もちろんその日、クラスみんなであい子ちゃんのみつけたいちぢくをもう一度食べました。

やはり園庭にある栗も少し色づいて、いがが割れてきました。よしのり君がいがを落とそうと棒でつついていきます。教師「まだ青いわよ」　よしのり「チョット青クテモ大丈夫、割レテルヨ」教師「大変、割れたのは中の栗が全部落ちてくるわよ」よしのり「落ッコチナイヨ、大丈夫、一杯開イテモ大丈夫」なんと三十分以上もかかって栗一個を落としたよしのり君、その栗を教師にみせるなり、「疲レタ」としやがみこんでしまいました。よしのり君の方が、教師よりも余程栗のことを知っています。

部屋にはスイッチが二つあって、電気をつけたり消したりして遊びます。その日は両方とも消してあり、部屋が薄暗くなっていました。それに不満なさとする君「電気

ツケタイヨ」と二つともスイッチをつけました。こう君がさかさず消します。さとの「暗イトイヤナノ」 たかひろ「オバケゴッコシテルカラ、太陽（電気を太陽にみたてている）ニアルトダメダモン」しばらくしてたかひろ「コケコッコウ、朝デスヨ」とつける。さとの「モウズウツツケテルヨ」こう「オレ達ユーレーダ」と消す。今にも泣き出しそうなさとの君。が、たかひろ君がさとの君の居る方の電気だけつけ、自分達の遊んでいる方は消し、これで解決しました。

園庭から続いて森があります。その森にはあけびや栗やどんぐりがなり、木登りもでき、子ども達の大好きな遊び場です。その森でお弁当を食べた時のことです。

ひかる「アッチ（森の木が繁っている方）向イテルト（向いてお弁当を食べると）タヌキヤキツネガ来タラドウスル？」

みゆき「居ナイヨ」  
こう「スゴイ森ノ中ジャナイト居ナイヨ」

ひかる君は夢一杯、いつも面白いことを言う子で、幼

稚園の森にたぬきやきつねが本当に居ると信じているようです。

ささえの貝殻をみせた時のことです。

りえ「ウワーキレイ、中キレイ、ズワーッと耳ニアテテイヨウ、髪ノ毛ノ音カモシレナイヨ」

けいこも耳にあて「海ノ声ガスル」次々耳にあてて、あい「ザンブリコッテ言ッテル」せりか「ザンブリコッテ言ッテルンジャナイヨ、ザザーザザーッテ言ッテルンダヨ」としのぶ「海ノ音ンタ」けいこ「キレイ、コノ中ナンカ光ッテ」いつ迄も耳にあてたり、ながめたりしていました。

近所の小学校で運動会をしているというのでみに行きました。小学生の踊りが終わった時、さとの君「風モ踊ッテル。アレ、踊ッテル。木モ（踊ッテル）アソコモ」たくや「アレ（万国旗を指さして）モダ」

部屋には空箱やプラスチックや発泡スチロールの容器

や紙やひもやセロテープ、ホッチキス、ガムテープ、パンチ等を、いつでも使えるように置いてあります。それで自由に描いたり作ったりします。ちえ子は楽器（マラカス）を二つ作りしました。材料が違うので、「コッチがコンナ音、コッチは違ウ」と音を比べていました。えり子も傍で同じような物を作っています。できあがったえり子の楽器の音をきいて、「コレ同じ音」とちえ子は自分の作った一つの楽器を鳴らしました。

また違う日よしのり君が二つマラカスを作りました。二つを別々に振って「違ウデショ、チッチャイ丸イ石ト大キイ石」一つには小さい丸い石を入れ、もう一つには大きい石を入れたというわけです。こうして音の違いを発見していました。

数日後、まいこ「楽器ツクッテルノ」とフィルム丸の円筒形の容器にセロテープを丸めたのを入れふっつけていました。このように次々と子ども考えた楽器が作られています。クラスの友達と歌に合わせて演奏されていきます。

楽しい運動会はいい天気恵まれ、無事終了しました。

その翌々日には途中から雨が降ってきました。それをみたあい子ちゃん「運動会終ッテツマンナイヨッテ雨降ッタンダ」あい子ちゃんにとってはそんなに運動会が楽しかったのでしょうか。

「三匹の山羊のらがらどん」の劇ごっこをした時のこと、配役をきめた時、一番小さい山羊を二人で演じることになりました。と「山羊ハ四本アシダカライイ」二人で演じるとあしが四本だからいいという意味です。

クラス三十二人が五つのグループをつくっています。そのグループには子ども達がつけた名前がそれぞれついています。お弁当を食べながら、あい「アイチャン、森グループにナリタイ（グループの名前を森にしたい）ダッテ森ニハイッバイイモノガアルモン」 あいちゃん森が大好きなことがよくわかりました。

幼稚園には春夏秋冬とも居るといふ話。

たかひろ「ヒマワリ（組）ニナツ子チャン。レンジ（組）

ノアキ子チャン。バラ（組）ノワタル君、ミンナ居ル  
しんた「年長デ居ルヨ、ミツハル」

自分のクラス（れんげ組）だけでなく、他のクラスとも様々なかたちで交流をもってきたことがこんな発言にあらわれているなど、うれしくなりました。

お祭で使った大きな和太鼓を園庭に置いてあります。子ども達はたたきたい時にいつでもたたけます。最初は二本のばちでたたきただけだったので音がの違いに気づいたようです。さとの君は一本のばちを太鼓に押しつけてたたき「音が違ウ」と発見しました。友達に「ココ押サエテ」と手のひらで押さえさせてたたく。「モット力入レテ」と力を入れて押さえると音が変わることも気づきました。たたく方の反対側を押さえても音が違うことにも気づきました。一方をたたくと反対側もふるえるのを「コッチカラタタクト（反対側で）キコエタ」と言っていました。

畑で育てた野菜を使ったりしてよくお料理をします。

この日は園で一番小さい三歳児のクラスがシチューをつくり「まだ残っているかられんげ組にもあげる」ということでした。お弁当を食べ終わった子から自分のコップを持ってもらいに行きました。帰ってきた子ども達は「早く行カナイト食ベラレナイヨ」「アト少シシカナクナッタヨ」「レンゲ組ミンナ足リナイヨ」「モウホンノチョッピリシカナイヨ」「モウスッゴイ少シシカナイ」と眼をまん丸にして口々に少ししか残っていないことをクラスみんなに話します。と私のコップにだまって自分のシチューの半分を入れてくれた子が居ます。けい子ちゃんです。けい子ちゃんはだまってこのようなことをする子です。

竹の棒を持ったせりかちゃんが「コッチ白砂入レタ」と竹の端の一節に砂を入れ、ひっくり返しました。砂はザーッとこぼれます。「あら、どうして砂が出てくるの？」ときくと「ココ（節の所）（砂が）通レナイヨウニシテアル」とのこと、竹には節があることを発見したようです。

動物ごっこは大好きな遊びです。子ども達のかばんをかけるロッカーの上部にはひきだしが二つついています。このひきだしをぬいて子どもがロッカーの中に立つと顔が出るので格好のおりになります。「ココハヒ熊ノ赤チャンノオリ」ところ君、「ボクハライオン」「兎」「ダメデスヨ(ライオンに)ウサチャンノトコ行ッタラ」など言いながら大きい箱積木で別のおりをつくり、何日も何日も、動物ごっこは続いています。

クリスマス会にサンタクロースが来てくれ、みんな大喜び。見送ったあと、園庭に出てその跡やサンタクロースの足跡をみつめました。

「サンタクロースオモシロカッタネ」

「トナカイミタカッタ」

「(サンタの足跡は)コレカナ」

「(トナカイは)空デ飛ンデ待ッテタノカナ」

白い物をみつけ「雲ガツイテル」

「行ッチャッタネ」

「ココニモチョビット(そりの跡がある)」

「ココモアシアト」

「ニオイスル ケーキノニオイスル」(サンタクロースさんがケーキを持ってきてくれたので)

「空ニ線ガアルノハサンタクロースノソリノアトジャナイ」

「引ッパールヤツノ足跡カモシレナイ」

「(深く掘れた所を)トナカイ力入レテグーンッテナッタノカナ」

「(木の皮がむけた部分を見つければ)トナカイガマチガエテグーンッテヤッタノカナ」

「サンタノ足跡」「絶対だ」

「イッパイトナカイノ足跡ガ、サンタノ足跡アッタヨ」

「(鎖の切れ端が木につながれているのをみつけ)アノソリ、ココニツナイダノカナ」と森の中迄探しに行きました。再び砂場の近くに帰ってくると

「オ砂場ニ足跡アッタ、ココニモ」

「山羊ノ隣、前ニハ大キイ穴ボコナカッタノニアッタ」

「アー、サンタサンオモシロカッタ」と心からサンタさ

んを楽しみました。

ここに拾った場面は全て自由な場面での子ども達の姿です。私はこの頃、このような自由な場面での子ども達の生活を知ることがますます大切だなど思うようになりました。教師は子どものありのままの姿をしっかりと知って保育をしていくことが大切です。

まさあき君が紙を何回も重ねて折って切り、広げて面白い模様をつくりました。それをみてよしのり君「ドウヤツクッタノ？」まさあき君は紙をよしのり君に渡し「コウヤツテ折リナ」よしのり君、まさあき君と同じように折る。まさあき「キチント折ラナキャダメダヨ」私はこの場面をみてびっくりしました。よしのり君は五月生まれ、まさあき君は二月生まれで今迄はよしのり君が、いつもリードして遊んでいたからです。

また、まさあき君がよしのり君に紙の模様を教えることからヒントを得て、羽子板づくりをみんなでしました。紙を折って切って模様をつくり、それを羽子板にはってローラーを上にかろがしその模様を羽子板に写し

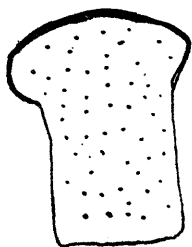
たのです。

このように子どもの自由場面での様子をよくみることで保育する上で重要なことは、この例でもわかります。

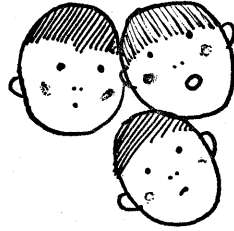
私は子どもが自由な場面で発見したことをクラスみんなのものになるようにしています。教師が一方的に教えるのではなく、子どもが興味をもち、発見したことを友達同志伝え合っていくのです。このことは子どもをよくみつけることにはできません。

これからも子どもをよく知り、私自身も新しい発見をしながら、楽しく保育の仕事を続けたいと思っています。

(神奈川県・安部幼稚園)



## 私のまわりの子どもたち



小畑 敏子

朝七時半に登園することも、夕方六時までいることも、多くの子どもは大変長い時間、集団の中で過します。朝早い子どもの中には、門の前まで食物をたべながら登園することもあります。帰りは園の近くの自動販売機でジュースを買ってもらい飲んでいたり、子どもの姿もみられます。園では午前中のおやつ、昼食、午後のおやつなど、家庭の食事の状況を十分

考慮し給食を実施していますが、個々の家庭の状況が異なるため、子どもたちにとっての食事における現実には厳しいようです。

Yちゃんの両親は自営業で夜おそくまで仕事をしているためどうしてもYちゃんの就寝時間が遅くなるようです。そのため起床時間が遅く登園も遅くなります。お母さんと話し合い、園の生活リズムに合



わせていただくようになりました。しかし、その後、園の近くに散歩に行つての帰り道、Yちゃんの元気がなくなつてしまいました。身体の具合が悪いのではないかと心配しましたが、Yちゃんはお腹がすいて元気がでないことがわかりました。

家庭における食事についてのアンケートの答えでは朝食をしてこないこどもは殆どみられません、こどもの活動などを通して現実にはしてこないこどもがいることがわかりました。

5ヶ月で入園したEちゃんは母乳で育てられました。保育園に入所するとき、お母さんは保育園に母乳を持って来るのでぜひ飲ませて欲しいとお話でした。母乳をのませることがこどもにとって大変良い、ということはわかるのですが、衛生上、管理上などの点でご希望にそう事は出来ませんでした。Eちゃんは標準以上の体格に成長しています。

Eちゃんのお母さんは一生懸命Eちゃんのことを

考えていますが、少し気にかかることがありました。お母さんの耳にウォークマンがつけられEちゃんは乳母車に乗って登園したのです。お母さんとのふれ合いが大切な乳児期、登園の途上、降園のときなど母子一対一のふれ合いの場としてとてもよい場だと思いますが、割合活用されていない場合があります。

Uちゃんは4ヶ月で入園しました。園では一番小さい年令でした。保母としての安定した関係を重要と考え保育をすすめました。お母さんも公開保育のときなどは出席して下さい、Uちゃんと保母との関係に大変満足し喜んでくださいました。一歳、二歳時期、園とお母さんとの連携も十分出来ていると思つていました。しかし三歳になる頃、本当に連携が出来ているのだろうかとの疑問をもつようになりました。

Uちゃんが三歳近くになつても、食事を保母に口

まで運んでもらいたがる。保母のひざにいつものりたがる、それらの要求がとおらないと機嫌が悪く泣きだすことが多いなど……。Uちゃんが二歳頃までは甘えんぼうのUちゃんという事で見守り、Uちゃんの要求を受けとめながら保育をすすめています。一人の保母が数人のこどもをみる場合、手のかかるこどもが独占していることがあります。Uちゃんもそのひとりでした。お母さんと話し合ってみました。生活習慣、づけは園でしているから家庭ではない。家庭ではスキんシップが大切なので食事の時はたべさせていますということでした。

お母さんたちの中には自分のこどもに十分手をかけてくれる保母、こどもの要求を受け入れてくれる保母を望んでいるようです。

手のかからないこども、月令の高いこどもはクラスの中に機嫌が悪かったり、泣いたりすることもがいてと担任に自分の要求をだしたり甘えたりする行為が少なく、園長などが保育室にいくと絵本をもつ

て来てひざの上ののるなどの行為がみられます。クラスの中に機嫌が悪くよくあそべないこども、よく泣くこどもがいるとクラス全体のこどもに影響し、クラス全体のこどもが十分あそべなくなりま

す。このように十分あそべないと家庭に帰ってからもよい生活はできません。

年令が小さければ小さい程、こういう状況がみられます。このような状況をくりかえしていくことは乳幼児期における人格形成の上からも影響が強いのではないかと思えます。保育園のおともだちとあそぶの大好き、でもお家のお父さん、お母さんとできるだけ一緒にいたい、こんなこどもたちの気持を大切にしたいと思えます。

(港区立本村保育園)

# サギソウの花

今井 百合江子

「滅びゆく美にひかれ」と題した新聞記事の切り抜きが目にとまりました。

埼玉の人―木村なほさん―サギ草研究家。夏、直径二センチほどのこまやかな花をつけるサギ草（ラン科）。色の白さ、花の舞い上がるシラサギを思わせるその可憐さに魅せられて、いつの間にか生態研究の専門家になった。ダイニングキッチンの一隅に研究資料が山と積み、主婦業

と混然一体。「もう十数年前になりますか。滅びゆく野の草サギ草の保護運動に加わったのがきっかけでした。この花の美しさは造花の神の快心作だと思うの。寒冷地を除いて全国的に湿原に群生していたといわれるのに、いま自生地は絶滅に近いのです。」旧東京女高師で幼児教育を専攻、生来の花好きと探究心が相まってサギ草に傾倒、云々。

彼女自身は自著の中でサギ草との出会を次の様に記している。「昭和三十八年、当時都立神代植物園在職の山田菊雄氏らにより国土開発の蔭でサギソウを救わんと鶯草保育会が設立され、ゆくりなくこの会に参加したのがサギソウと私の出会でした。」この出会が彼女の平凡な日々を変えた事は確かです。彼女は自分のことを「サギ狂」と呼んでいます。まさに、花に憑かれた人生とでも云いたい程の熱の入れようでした。専業主婦の彼女が何時の間にか「鶯草保育会」の有力メンバーとなり、今では日本産サギソウの殆どがその狭い庭に集まって来ました。野生種保存の仕事が彼女の肩にかかって来ました。

最近、高まる自然指向の風潮の中で、この花も多くの愛好者を得、絶滅を免がれたようですが、野生地ではな

お減少の一途を辿って居ると聞きます。と云うのも、前述の様に、將に白鷺そのものの楚々とした花形と微かな香り（程度によりますが）とにひかれて、密かに持ち去る人が跡を絶たない故の様です。他方土地開発による湿原の荒廃も故なしとは申せません。明治の初め頃までは東京都内にもこの花が見られたとか。世田谷区はこの花を区花に指定して居ります。同区には奥沢・代沢・北沢等「沢」のつく町名が現在も多く残って居りますが、恐らく其処には清水が湧き清流がせせらぎ、夏なお涼しい緑蔭や、草原が広がって居たのでしょう。サギソウの様な湿原を好む野生植物の生存にはこのような環境が必要でした。この花を惜しんで校章に制定した学校もあります。目黒区立八中がそうです。同校校歌の作詞者佐藤春夫は、一番、四番の歌詞の中にそれぞれこの花を頌って居ります。

(一)君は聞かずやむさし野の、碑衾あたり伝へ云ふ、信義に生きし白鷺の形見と咲ける野の花ぞ、云々。

(四)聞けや清しき多摩の流れ、白鷺の花咲く中に、云々

昨秋次のような葉書が筆者に届きました。「御無沙汰しています。先生お変わりもないでしょうか。サト（末

娘）はおかげで結婚し、いよいよよさぎ草と、とり残された私の晩年がはじまるようでございます」（原文）純白のウエディングドレスに包まれて、幸福そのものように微笑んで居る花嫁姿の郷子さんの写真の下方に、なほさんの心境が小さく書かれてありました。娘二人を嫁がせて静かな生活に足を踏み入れた母親の心が痛い程滲んで居ました。子育てを終えた安堵と、一抹の淋しさの中に、けれどサギソウと生きるゆとりを得た女の幸せが筆者の胸にしみ透りました。

女学生の彼女を教えた日日から何時の間にか四十年が過ぎました。私も亦職を退き独りの晩年を迎えることになりましたが、さて、なほさんにとつてのサギソウの様な確かな何かが私には得られたのだろうか、ふと思うこの頃です。

註一 読売新聞埼玉版21頁 昭和55年2月27日抜粋

註二 昭和二十二年三月東京女子高等師範学校保育科卒

註三 『サギソウの観察と栽培 森なほ著』ニューサイエンス社グリーンブックス

註四 鷺草保育会機関誌第四号昭和42年3月1日発行



（森）花  
写

# 露 草

高 原 典 子

林が新芽のたいまつを燈し、草が萌え立つと、季節を訪ねて歩きたくなる。

和らいだ日射しは、川面にキラキラと照り返し、冬の間病みがちだった子ども達を訳もなくはしゃがせる。

幼い子どもと連れ立って、草の花を摘みながら過ごすひとときには、それだけで不思議に満ち足りてしま

うものがある。私達の歩みは、いつもこれといったあてもなく、時に河原、時に雑木林に向かい、草の花に誘われるまま道らしい花野を辿るだけなのに。

小さな手で摘まれたとりの花を小瓶に差すと、季節がひっそりと生命の詩を歌い出す。

草の花の中でとりわけ好きなのは露草だ。六月の雨の野辺に咲く花びらの藍色は、たとえようもなく美しい。あえかなのではなく、凜とした姿のゆえに。

露草はその昔「月草」と呼ばれ、和歌にも多く詠まれてきた。「つきくさの」という枕詞さえ生まれたのは、花の命の儚さが歌人の心を誘ったからなのだろう。月草で衣を染めた縹色の褪せやすさも、哀の色を深めた。

「枕草子」は、「草」の段を「つき草、うつろひやすなるこそ、うたてあれ」と結んでいる。

薄が「草の花」に数えられているのに、つき草は何故か「花」として扱われていない。「万葉集」からの流れのまま「うつろひやすい」として、「嘆かわしい」とい

う評まで頂戴している。もっとも「万葉集」に咲く月草は情緒の花、「枕草子」では観念の香りがするが。

いずれにしても、露の間に咲く月草の鮮やかな花の色に歌心を委ねるのではなく、月草が、「褪せていく時間」の美しい記号として筆の跡に咲いたのは惜しいことだ。

大田垣蓮月は、幕末から明治にかけての乱世に長寿を刻んだ歌人だったが、月草をこう詠んでいる。

くもまにはまだあり明のつきくさに咲きまじりたる  
あさがおの花

夏の暁の風景だが、珍しく「つきくさ」がすこやかに歌われていて嬉しい。修辭の問題はさて置き、この和歌は、色彩の豊かな静物画ともいえる。月草も朝顔もたった一日の短い命の花だが、咲いている間の最も美しい時に視点が据えられている。それは、書画にも秀で、晩年を埴細工「蓮月焼」に打込んだ蓮月尼ならではの「創り手」のまなざしかもしれない。紛れもなく月草に生命を与え、美しさを凝視めるそれである。

幼な子と夫が次々に身罷った後、黒染の衣を着て五十年もの道のりを歩んだ蓮月だが、月草の藍のように鮮やかに「今」という時の生命を生ききった人だった。

露草は「螢草」とも言われる。

幼い頃、螢は、露草の朝露を飲みに来るのよと聞いていた。裏庭の鶏小屋の傍にひとむれの露草が咲くと、螢が宿っているように思えて覗きに行ったものだ。もちろん花の中に螢が見つかったことはなかった。藍色の露草の野に淡やかな光を放つのは、幻の螢なのだろうか。疲れた螢を憩わせる為にも露草を摘んではいけない、と祖母は言ったのかもしれない。うつろいやすい花への慈しみだったのだろう。

# トロピカル・フラワーズ

阿久澤 宋太郎

私のよく旅行する所が熱帯地方なので、ずい分変わった花を目にすることがある。

最近ではグアム・サイパンあたりへ出かける人も多くなっているが、まず目を引くのがフレイム・ツリー *Flame tree* で真赤な花は熱帯の強烈な太陽の光に調和するように咲きほこっている。日本人はこれを「南洋桜」と称して親しんでいるという。

しかし、現地の人々はギンネムノキ

といわれる帰化植物が急速に繁殖し、至るところにはいりこんで困っているのでつよい関心を持っている。日本人の旅行者はあの白い花にエキゾチックなロマンスをかきたてられる。

ボルネオ地方にも何回か出かけ花に親しんでいると現地に住んでいる人たちと共通の感情のあることも感じるし、また、異なった感情を持っていることも感ぜられる。

ボルネオでは、どこの家庭でも庭木としてマンゴー (*Mangifera indica L.*) が植えられている。

これが独特のたたくまいをつくりあげている。花季は四月頃で実の熟すのは七月頃であるが、品種により大きい実のものもあるし、小さな実のものもある。

面白いことに一年中実が見られる。どこかの家の庭に実がなっているのが見られるのである。さしあたり、日本的に表現すれば「狂い咲きの花」に次々に実をつけるため、市場などには年中マンゴーの実が並べられている。

マンゴーの花は新しい枝の先に放射状に小さな花をいっばいつけるので見事ながめである。この花にいろいろ



るな昆虫がやってきて群れとんでいる。

となりの木にはマンゴーの実がなっていると聞いた具合である。

家でマンゴーの実を食べるためにわざわざ木にのぼってもぎとってくるようなことはしないようである。

よく熟して木から落ちるとそれをひろってきて食べるのである。

このため独特のやわらかさと匂いがあり、これは熱帯独特のものである。

朝起きて、木の下へこの実をひろいにくくと、きまっていくつかは、ネズミにかじられている。ネズミも木から落ちてくるのを待っているのだから面白い。

夜半によくイヌが吠えるのでぞいてみると、木の下にむかって吠えている……ネズミが気になるのである。

これも面白いとり合わせである。

路傍に出ると、いわゆる華僑たちが南中花と称するアサガオの一種が至るところに咲いているし、また、相思樹 *Acacia* と称する木が至るところに植えられていて道路や広場などの景観をつくりあげている。

この樹もいわゆる狂い咲きが多く、どこかで黄色い花をつけているのが見られる。

ウツボカズラ *Nepenthes* もボルネオが故郷であるが、日本では食虫植物として知られているけれども、ボルネオでは捕虫袋の中にスコールの水がたまり、蚊の発生源になるといっているので目のかたきにされている。

若い捕虫袋はたしかに捕虫のはたらきをすることは、キナバル山登山の際、たくさん捕虫袋を割って調べてたしかめたが、少し古くなったものはその機能を失い、あとは蚊の幼虫の住家になっている。

しかし、若い捕虫袋の中に一種のナメクジが住みついでいて、やはり生物の世界は複雑な関係のあることを示している。

キナバル山及其周辺のだけでも十種類以上のウツボカズラが見られ、木の枝の上まではいのぼってたくさん捕虫袋をつけている様は壯観である。

やはり熱帯地方は花の豊庫であり、大きな花園であるといえるようである。

(お茶の水女子大学附属小学校)

## 卒業式 お茶の水女子大学附属幼稚園

堀合 文子

当園の卒業式は、場所も方法も、よく言えば格式が高く、わるくいえば旧式と言えましようが、私共は伝統を守り続けている事にささやかな誇りも感じております。

場所は大学講堂（徽音堂）でいたします。

三月十二日午前十一時。

### 式次第

- 一、入場
  - 一、君が代
  - 一、卒業証書授与
  - 一、園長式辞
  - 一、お礼のことば
  - 一、卒業のうた
  - 一、退場
- 以上
- 卒業生は広い講堂の最前列から着席し、在園生はその

後に着席します。更にその後にはやはり卒業の保護者を前にして保護者が着席しますが、勿論大人の椅子のため年少組などはうずもれるようにすわっております。一四〇〇人入りの講堂の半分位の位置をしめる状態です。

壇上には、中央に演台がおかれ、その上には、黒塗のお盆の上に卒業証書がおかれています。演台の後方には枝ぶりのよい松の植木鉢がおかれ、正面からみて向って右側には園長先生、左側には担任二人が着席し、その後方にはグランドピアノの大型があり、そこには伴奏者がおります。

壇の下は幼児席との間に、右側には先生二人、左側には他の先生方が扇開きに着席します。

ポーンとピアノが奏され全員起立し、おじぎをして始まります。

君が代を一回うたいます。

“これから証書をいただきます。〇の組の女の方立ちましよう”との進行の先生の言葉に、〇の組の女の人は一列になり、壇上に上がり、右側の園長先生の席のそばに二列にならびます。ならびおわたのをみて“〇〇〇子”

と一名ずつ名を呼びます。

呼ばれたひとは演台に園長先生が立たれ、担任が介添をして前にゆき、一礼して、細くまき白いリボンでゆわえてある卒業証書を両手でいただき、更に一礼し、左側、相對する位置にならび、全員、女の人がそろつたら、先頭の人は、誰に言われなくとも壇をおりて着席します。

このようにして、卒業生は、各組男女に分かれて卒業証書をいただきます。全員終了すると、次は園長先生のお話。それがすむと、「海と山のくみの方、立ちまじょう」の指示で、卒業生全員起立し、園長先生が演台に立たれると、「しょうしょをいただいて、ありがとうございます。ありがとうございました」と全員で唱和し、礼をします。

「卒業のうた」進行の先生がいわれると、倉橋惣三詞、小松耕輔曲の卒業のうたを合唱します。

「おかあ様方も立ちまじょう」との合図に全員が起立し、全員一礼して式を終了いたします。

園長先生が退場、続いて卒業生が中央の道から退場します。

この間約一時間たらずで、卒業生は勿論、年少組も保護者も静かなどちらかというと厳肅な式です。

幼稚園らしいと言わわけにはいかないでしょうが大学の講堂は、人生はじめての卒業式に大きな緊張と力を与えてくれると思います。

連日、式の練習をするわけでなく、きまつている順序や、証書のいただき方は教え、計三回位は致しますが、個人独特の歩き方、証書の受取方は、ほほえましい姿です。今は自分の卒業式でもあり一しょうけんめいやるという判断は、これ又日常の保育のつみ重ねがあらわれ、二年三年の生活が思い出されます、担任も保護者も感無量のところす。

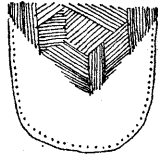
証書も大学と同じ大きさの縦約31cm、横約40cmの大きさいもので卒業証書です。大学印、園印、園長印があざやかに押されているのは人生はじめての卒業式にふさわしい重味があります。

「右は当附属幼稚園においてその課程を修了したことを証します。」

金のふちとりの中にかかれています。

# 近代短歌に現われた子ども

(九)



大塚  
雅彦

(17) ちの  
茅野雅子

今回から閨秀歌人たちを何人かまとめて見ていこう。与謝野晶子ほどの巨星とはいえないが、いずれも近代短歌史上、ユニークな活動と作品を示した女流たちである。

茅野雅子は本名まさ、明治十三年五月、大阪市東区道修町どしやうの薬種問屋増田家の娘として生まれた。生家は順血湯本舗の古い店である。堂島女学校、相愛女学校をそれぞれ中退、その後、明治三十七年上京して日本女子大学校（当時）国文科に入学、四十年春卒業し、同年夏、東大生で「明星」同人であった信州出身の茅野儀太郎（蕭々）と結婚した。夫は後にドイツ文学の泰斗となり、ゲート研究等で知られた詩人学者である。彼が旧制

三高の教職に就いたので、夫と共に京都に赴いて住んだ。大正六年夫が慶大教授に転じたので共に上京した。

大正十年より彼女は母校の日本女子大学校国文科教授となり、「中古文学」や「作歌」を担当した。翌十一年、

夫も同校教授を兼ねるに至ったので、「仲のよいおしどり夫妻」（青木生子『茅野雅子』昭43・6）として知られた。昭和二十年空襲による戦災をうけ軽井沢に避難、戦後上京して母校の寮内に仮寓し、学校の復興に起ち上ろうとしたが、翌二十一年八月二十九日夫が脳溢血で急死、雅子もまたそれから僅か数日後の九月二日のしかも同時刻に長逝した。享年六十七才、病名は肺結核である。共に現職のままほとんど一緒に逝去した夫妻の告別式は日本女子大の大講堂で行われたが、偕老同穴の古い喩を想起させる。まことに安倍能成が述べている如く「この夫婦は外にちょっと類のない珍しい一對」であり、「哀しい、切ない、深いきづなに繋がった夫婦」（安倍編『蕭々雅子遺稿抄』昭31・11）であったといえるであろう。

雅子は少女時代から「文庫」に早く投稿していたようであるが、明治三十三年（二十一才）「明星」に移り、やがて与謝野晶子（明治11年生）・山川登美子（明治12年生）・増田雅子（明治13年生）の各一才違いの三才女は「明星」女流の中でも特に頭角を現わすに至り、後に合著歌集『恋衣』（明治38・1刊）を刊行するようになるのである。「明星」廃刊後は「スバル」に短歌のみならず、詩や小説をも発表し、また「青鞥」にも作品を発表した。その後「婦人の友」の和歌選者になったのを始め、多くの雑誌・新聞の選者をした。大正七年には「春草会」という短歌会を組織したり、昭和十二年には「茅花会」を主宰して弟子たちを育成した。こんにち歌壇で活躍している女流歌人の中には、その門弟が少なくない。著書として唯一の単独歌集『金沙集』（大正6・1刊）があり、また、夫と共著の隨筆集『朝の果実』（昭13・11）がある。前述の安倍能成編『蕭々雅子遺稿抄』も参考になろう。研究書としては青木生子博士（現日本女子大学々長）著『茅野雅子』がまとまった唯一のものとい

つてよい。

雅子の歌風は初期と後半生では変化があり、一概には論じられないが、「新詩社に欠けている自然詠風の叙景的な要素」（青木氏）があり、晶子や登美子とは異った特色を示している。優婉のおもむきを湛え、清楚であり、人柄と育ちの良さを示す温雅さを持っていて、「内に激しい情熱を秘めていながらも、それと同居する温良さ」（青木氏）が読者を惹きつける点がある。

① 白百合の蔽ふと見たる夢のまにわが子よわれは母となりぬる

② 六歳の子の母なる今もそのかみの夢よりさめずひな芥子の花

③ をさな児の遊びの如く美しく真実こめて世に生きてまし

④ 病ゆゑもののおはれをいち早く知りそめし子をかなしと思ふ

⑤ はろかなる岸に手をふるわが子見ゆこころいらだつ  
甲板かんばんにして

①は「明星」終刊号（明治41・11）所収。「新詩社詠

草」四十三首中の一首である。雅子は明治四十一年五月、長女晴子を生み、九月に前述の如く夫の赴任と共に京都に來住し、その後の数ヶ月の作品がこの詠草として発表されたわけだが、若い母として始めて人の子の親となった戸惑いや驚きや感傷や不安等が、新詩社風の上句の表現などに現われているといえよう。「汝が母はをかしわが子よ汝を見れば涙するなり何ならなくに」「木の葉ちりをかしき秋の何故か今年は悲し人の子の母」等の作品もある。また雅子はこの頃書いた小説「親ごころ」（「家庭」2巻3号、明治43・2）に、ヒロインの町子に托して、子を産んだ若い母の心境を詳しく描いているのも参考になる。

②は『金沙集』所収で、「母と子」の中の最初の「若き母」一連十九首中の一首。「恋愛至上の心や、母としての矛盾、若きあこがれ心が多くいだかれている」（青木、前掲書）というべく、六才の子の母親となっている今もなおその昔の少女時代の夢からさめない、というの

である。この前後に「人の子の母なる故か風にとぶ草の実にさへ心ひかるる」「うら若き夢の数多は消えねども二人の母となり果てしかな」等の作品が載っている。浪漫の夢がさめない一方、やはり風に飛ぶ草の実にも心いかれる母情というものを自覚しているのである。「二人」というのは長女晴子と、大正二年に生まれた次女多緒子である。

③も同じく『金沙集』所収で「母と子」末尾一連十九首中の一首。後年、自選集にしばしば入れ、乞われるとよく短冊に書いた歌であり、得意な作品だったのであろうし、集中の佳作といえよう。古泉千樞の項で指摘した『梁塵秘抄』中の、子どもを詠じたうたに基調が似通うものがあるが、青木博士は「若き妻、若き母の哀歎を歌いあげた『金沙集』は、詮じつめればこの「美しく真実こめて世に生きてまし」という雅子の悲願の底から生まれた声である」と述べている。

④は「婦人の友」14巻12号（大正9・12）所収。長女晴子は病いがちであったが、必死の看病の甲斐もなく、

大正十二年、僅か十六才で夭折した。魂の早く発達した感受性鋭い少女で、多くの文章や詩歌等を書きのこしていたという。雅子は悲しみのどん底に落とされ、「母としての資格がない」と自らをとがめ、「死ぬことを最も安き一つぞと」すら思い続けたようである。この歌も、そうした生前の愛児晴子に対する母性愛が滲み出た哀切な作品である。

⑤は「婦人の友」20巻1号（大正15・1）所収。雅子は、先にドイツに留学していた夫蕭々のあとを追って、大正十四年二月渡欧し、欧州各地を巡り、十一月十日榛名丸で帰朝した。これはその折の作である。岸で手をふっているわが子を早く抱きたい焦りが、眼に見えるような歌である。「幾万里海を渡りてかへり来ぬひとりのこの子いだかんがため」という作品もある。若くして死んだ姉娘を忘れられない想いもオーバーラップされて、「ひとりのこの子」という一語にこもっているように思われる。

(18) 原阿佐緒

原阿佐緒は本名あさを、明治二十一年六月宮城県黒川郡宮床村（現大和町）宮床の素封家、原家の一人娘として生まれた。生家は塩や麴の販売を業としていた。宮城県立高女を病気のため中退して上京、日本女子美術学校、奎文女子美術学校等で日本画を学ぶ。その美校の教師で翻訳家でもあった小原要逸（号は無絃）と不幸な恋愛をし、長男千秋を生む。間もなく彼と別れたが、大正三年、郷里で画家の庄子勇と結婚し共に上京、次男保美を生んだ。この頃、上京と帰郷を繰返していたが、庄子とも間もなく離婚した。その後、東北帝大教授の物理学者でインシュタインの相対性理論を日本に紹介した石原純博士（アララギ派の歌人）と相知ったが、妻子のある博士との恋愛事件が大正十年マスコミによって大きく報じられ、この事件は世人を驚倒させ一世を風靡した。彼女は千葉県保田海岸の博士の別荘で博士と数年間同棲したが、結局別れて帰郷した。その後上京してからはマ

ネキンガール、バーの経営、映画女優等の浮草的とも見える生活を繰返したが、これも彼女の天成の美貌や名声を利用された面が強かったようである。しかし晩年は、昭和二十九年頃から映画俳優の次男原保美（夫人は中川一政画伯の令嬢）夫妻に引取られ、「老年の平安」「心安けき晩年」（吉屋信子『ある女人像』（昭和・12））を得た生活を送ったらしい。昭和四十四年二月二十一日死去、老衰による心不全であった。八十才である。

彼女は前述の如く三回も不幸な恋愛や結婚をし、その他に歌人古泉千樫との恋などもつたえられ、「恋に弱い」（吉屋、本掲書）女、今の語で言えば「恋多き女」として中傷や誹謗にさらされがちであったが、ジャーナリズムに騒がれて実像よりも虚像がつけられる面も多かったのではあるまいか。私は戦後一度、彼女を見かけたことがある。東京・新橋の喫茶店であった。息子の原保美と一緒であった。保美氏を私はスクリーンで何度か見て知っていたから、すぐわかった。彼女は小柄で、品のよい老婆という感じだった。これがあの一世を驚かせた恋



のヒロインの果てなのか……と、私は感慨をもって見つけたのを、おぼえている。

彼女は明治三十九年頃より「明星」を耽読し、四十一年頃より作歌に熱中し始め、翌四十二年「新詩社」に入り「スバル」等に歌を発表した。次項で述べる三ヶ島霞子とはこの「スバル」時代から親しく、後、二人ともアララギ派に移ってからも親友であった。大正二年「アララギ」に移り、歌風も変化した。その後、大正十三年「日光」同人となったが、晩年は歌を廢し、歌壇からも忘れられたような存在であった。歌集には『涙痕』(大正2・5)、『白木槿』(大正5・11)、『死をみつめて』(大正10・10)、『うす雲』(昭和3・10)等がある。数奇なる運命にもてあそばれた苦難の人生の中で、愛児に充分に愛を注いでやれない悲しみをせつせつとうたった作品が少なくない。

①逢へばみなふるさととはただにわが児をほめて往ぬはた寂しかり

②吾児居ねばひとりこもりてこの母は茶碗に乳をしほ

りぬにけり

③吾子かなし田舎なまりのものいひに人笑はせつ電車の中に

④待つといはば心みだれん片仮名の児が手紙すら得がてにを経つ

⑤やうやくに心和ぎたれど眠られずひたすらに吾子が寝顔を描くも

⑥吾が友にあはれがれつつはれやかに街を急げり子が衣を持ちて

①は歌集『白木槿』所収。阿佐緒は前述の如く明治四十年に長男千秋を生んで、千秋やその父親である小原要逸と共に帰郷した。これはその頃の作であろう。実は小原には妻子があったのであり、そのことが判ったのは阿佐緒の妊娠後であった。つまり、この子は当時の語でいへば私生児だったのである。村人たちは逢えばこの子をほめて去ってゆくが、この子の運命も、その母である作者自身の運命も薄倅のものである、という寂しさを噛みしめていたのが此の歌であろう。

②も『白木槿』所収。この「吾兒」は大正四年に生まれた次男保美であろう。阿佐緒は妊娠により身体が甚しく衰弱したり、産後の肥立ちも悪く、母に伴われて東京から郷里に帰ったものの、元来の病弱と産み疲れのため東北帝大付属病院に入院するに至った。退院後も仙台の親戚に身を寄せ約一ヶ月通院した後、やっと帰宅するありさまだった（小野勝美『原阿佐緒の生涯―その恋と歌』昭49・11による）。この歌はその頃のいづれかの期間、子どもと離れていた折の作であろうか？ 歌意は明瞭で、殊に下句が、赤兒と離れて孤りいる母親の、張る乳房から乳を茶碗にしぼるといふ悲痛な動作を具体的に描いていて、あわれを誘う。この頃の歌に「わが背子は遠し兒はまだ乳ばなれもせぬにはや病みそめし秋」というのもある。

③は歌集『死をみつめて』所収。阿佐緒は当時不和になっていた怠け者の夫の庄子勇に絶望して、独力で働いて子供の養育料を得るべく、赤子の保美を預けて上京し、本郷の書店の事務員となつて働いた（小野、前掲書によ

る）。これはその頃の歌であろうか？ わが子が田舎方言でものを言つて電車の中で乗客たちを笑わせた、というのであるが、あるいは此の歌の「吾子」というのは、当時十才くらいになっていた長男千秋であろうか、次男保美は当時未だ満二才くらいであるから―。この頃の歌に「ひさびさに相見し吾兒を心ゆくまで抱きもあへず勤務に出でゆく」「なげきつつ我のいへればききわけてうなづく吾子を往かしめがたし」という作もある。

④は歌集『うす雲』所収。巻頭の「夜を鳴く鳥」の中にあり、この一連には「この一篇をわがためになしみを負へる女性に捧ぐ」の詞書がある。この歌集は石原純の序文があるのだが、阿佐緒は既に彼と千葉県の保田で七年の同棲をしていた。しかし、遠く離れて故郷のみち、くに居るわが子の片仮名で書く手紙すら得ることが困難である日々を送った（「得がてにを」の「を」は添字的な助詞）という状況で、それを思うと心は果てなく乱れるだろうという歌意は、恋に生きながら子供に惹かれる、いうなれば「女」と「母」の分裂に身を焼き、男を

愛する心とわが子を思う心との二律背反に悶える女性の心情を告白しているわけで、それ故にこそ、天下の女性たちに捧げようという詞書の語を書けつけたのである。しかし、一、二句あたりの表現は通俗性を感じさせ、作品の調子を浅くしている面もある。

⑤も『うす雲』所収。「合離抒情（其の四）」の中にあり、この「合離抒情」は四部に分れていて、各連とも吾が児との離居、邂逅を綿々とうたいあげている。この歌の前に「別れ去なむ吾子と思へば寝顔だに切に愛しく吾が描かんとす」があるから、去ろうとする愛児との別れのためにつらい気持を抑え、ようやく自分を納得させて心は和らいだ筈なのだが、やはり眠られないので子供の寝顔を描くというのである。阿佐緒は前述の如く始め美術学校で絵を習ったのであり、昭和初年に自画像なども描いており、この歌集『うす雲』の巻頭にも、自ら描いた椿の絵を収めている。これらの哀別離苦の想兒詠は、今日読んでみると、何か新派悲劇的な感じすらあって文学的造型度が低く、近代性や知性に乏しい作品という感

がなくもない。しかし福田清人氏も述べているように（小野、前掲書に氏が付した序文）、「女性解放前の社会の重圧の中に、自ら解放しようとして生き抜き、戦い破れ挫折したかに見える明治生まれの女性の悲劇的な生涯」の記録の一端と見れば、歴史的な意味もあるのではなからうか。⑥も『うす雲』所収で「遠き子に」一連の中にあり、「人にひそかに子が衣を買」い、それを持って、友にあわれまれながら、心晴れやかに街を急ぐという情景の詠出は、やはりまぎれもなく、古今を通じて変らぬ女性の歌であり、母性の色濃く刻印された作であって、一見はなやかでエキセントリックな生涯をたどり、石原純との事件では「普通の女性とは異った特殊の婦人」と新聞に書かれたり、果ては「悪魔」「妖婦」とまで罵られた一人の女性も、このようにわが子をおもう哀情を短歌に念々にうたいこめていることに、あらためて私は思いいたらざるを得ないのである。

（お茶の水女子大学）

## ニュージーランドの幼児教育を訪ねて

松川 由紀子

昨年の十月、早春のニュージーランドをひとり旅して、幼稚園やプレイセンターなどを訪ねた。オークランド、ウェリントン、クライストチャーチ、そしてカンタベリー平野の小さな町メスベンを訪ね、幼稚園九カ所、プレイセンター五カ所、小学校低学年クラス三カ所、保育センター三カ所、そして教育大学二カ所、合計二十二カ所の教育、保育機関を見学することができた。この国の幼児教育の大体の様子をつかむことができたように思う。幸運にも、見学の際には地域の幼児教育行政官や教育大学の先生たちが案内して下さったので、説明も的確で、とても充実した機会であった。また、旅行中はほと

んど教育大学の先生の家庭に泊めていただいたので、グループ旅行では味わえない、この国の人々の日常生活にも若干ふれることができた。ニュージーランドの幼児教育については、教育省の幼児教育専門官マイケル・クーパー氏によって本誌に紹介していただいているので、ここでは、見学した感想を若干記したいと思う。その前に、この国の幼児教育制度の概要を少し話しておきたい。

日本とは異なり、幼児教育は三、四歳児が中心で、五歳児は小学校に行く。中心的な機関は、教育省の関係する幼稚園とプレイセンター、社会福祉省の関係する保育センターである。現在、三歳児の半分、四歳児の約八十

四パーセントがこうした機関に通っている。大体、三、四歳十人のうち、三・八人が幼稚園、一・三人がプレイセンター、一・一人が保育センター、〇・七人がプレイグループ、合計六・九人が何らかの幼児教育、保育を受けている。

ニュージーランドは、人口約三一六万人（一九八〇年）、面積約二十七平方キロメートルの小さな島国である。人口密度が低く、温暖な西岸海洋性の気候のため、緑の空間が多く、人々の生活はともゆったりしているという印象をもった。国民のほとんどはイギリスからの移住者であるが、原住民のマオリ族、南太平洋諸島からの移住者が混合していて、そのためにいくつかの特色ある教育政策がみられる。印象的であったのは、ウェリントンの幼稚園を見学した時、子どもたちの人種がまちまちであったことである。郊外のペトリーネ幼稚園には、建物のなかに話し合ひのできるコーナーが設置されていて、幼稚園の先生と親たちによっていろいろなミーティングがなされているところであった。幼稚園ならびに幼児教育の

大切さを親たちに理解してもらい、彼らの相談に応ずるようにしている主任教師の献身的な姿勢がともさわやかであった。そこには、親たちの子育てをあくまで援助していくという姿勢がたらぬかれていた。初期の幼稚園運動の創始者たちの子どもの発達を守るといふ姿勢に通じるものを見るような思いであった。また、ストラスモアパーク幼稚園には、十カ国の子どもたちが通っていて、幼稚園の生活のなかで英語が話せるようになっていく子どももいるということであった。この国は、人種の混合に対して差別意識がなく、むしろ、文化的発達の遅れる子どもたちの教育対策に積極的に取り組んでいるのである。そして、教師たちの姿勢のなかにも献身的と思えるような熱意が感じられる。

また、わずか人口千人の小さな町メスペンのプレイセンター、小学校を訪ねた時、貧弱な印象はまるで受けなかった。教育政策が、国のすみずみまでゆきとどいているのである。あたりは、たくさん羊がゆったり群れるのどかな牧歌的な地であった。

幼稚園やプレイセンターを見学した時の一般的な印象としては、日本の幼稚園や保育所に比べると、一見したところ、とてもゴタゴタしているという感じである。よく見ると、子どもたちが自由にいつでも使って遊べるように、各コーナーのそれぞれの棚や台上に非常に多くの遊びの材料が所狭して置かれていたり、子どもたちの描いた絵や製作した作品（粘土、切り紙など）があちこちに並べられていたりする。徹底した自由遊びが子どもたちに保障されているのである。それは、小学校低学年のオーブンクラスを見学した時も同様であった。五、六、七歳児がそれぞれ好きなコーナーで自由に遊んでいて、外見は幼稚園とほとんど差がない。教師は、子どもたちの様子を見ながら、時たま、いくつかのグループに分かれて活動するという時間をもつのである。ほとんど全員が五歳児の誕生日の翌日から小学校に入学するのであるから、ひとりひとりの発達に応じた取り組みを教師はすることができず。日本のように、四月一斉に入学して教室にすわられる、というわけではないのである。

子どもたちひとりひとりの興味、関心を大切に育てていくという幼児教育の方針は、自由遊び重視の教育とともにいろいろなところでみることができている。子どもたちの入園の日はまちまちであるし、朝はいつ登園してもよい。また、いつおやつを食べてもよい。勿論いつ降園してもよいのである。それぞれの子どもにあった教育の時間、おやつ時間が考慮されているのである。日本の一斉保育のやり方になれている者から見ると、とてもルーズに思えるかもしれない。

また、各地で案内、説明していただいた幼児教育行政官や教育大学の先生たちの印象も忘れられない。きびきびした行動、説得力のある会話からは、自信をもって仕事にあたっておられる様子が伝わってきた。彼女たちは皆、かつてはベテランの現場の教師であった方々で、なによりも明るく、やさしい人たちであった。こうした人たちと友だちになれたことは最大の収穫であったろう。地域の幼児教育を心から愛し、守っている行政官たちの誠実な姿勢、養成面に打ち込んでいる教育大学の先

生たちには、本当に頭の下がる思いであった。事務室の壁にはその地域の実情を示す資料がたくさん掲示されていて、それを見ながら説明して下さったのだが、仕事に情熱をそそいでいる人々の話は、とても気がいい。オークランド教育大学のブロックett先生の夜間の幼児教育講座に参加した時の印象も忘れられない。講義をする側も聴講する側もとても熱心である。まずその熱意に関心した。また、同大学のキーン先生が、乳幼児保育の面

はまだ遅れていて、職業を続ける婦人たちは大変であると真剣に話しながら、保育センターを案内して下さったが、その先生の姿も忘れられない。そして、クライストチャーチ教育大学のハギット先生の研究室では、学生たちのやる気を起こさせることが大切であると話されながら、先生手づくりの教材をあちこちの棚から取り出して見せて下さった時、同職の者として、ガーンと頭を打たれたと思ったのであった。ウェリントンのニュージールランド教育研究諮問機関を訪ねた時には、スタッフの婦人研究者の方々の真剣な研究態度にふれることができた。

こうした多くの人々との出会いはとても貴重なものであった。全員が、仕事に自信と誇りをもっていた婦人たちであった。いずれも、この国幼児教育を支える第一線の面々で、彼女たちの風姿は忘れられない。

特に、このたびの旅行で考えさせられたことは、特徴的なプレイセンターの制度と幼児教育方法のことである。プレイセンターについては、クーバー氏の報告をお読みいただきたいが、とてもユニークなものである。教育方法面に関心したことは、徹底した自由保育と棚いっぱいの遊びの材料（教師の工夫した手づくりのものも多くみられる）である。そして、そこに流れる幼児教育に対する親の熱意と教師の熱意、それを支える幼児教育行政。私にとって本当によい勉強になった旅である。

こうした充実した旅になったのも、在日ニュージールランド大使館ならびに本国教育省の方々のあたたかいご配慮のおかげである。心から感謝申し上げたい。そして、これからニュージールランドと日本との交流がより実りあるものになるよう祈りつつ、ペンを置く。（山口女子大学）

## ニュージーランドの幼児教育（一）

マイケル・クーパー

松川 由紀子・訳

☆ ☆ ☆

マイケル・クーパー氏はニュージーランド教育省の幼児教育専門官である。政府が幼児教育行政を遂行していくように、幼児教育に関する諸事項を政府に助言すること、教師や地域の幼児教育行政官に専門的な指導、助言をすること、などが氏の任務である。かつて、教育大学において幼児教育に関する講義をしていたこともある。このたび、氏からニュージーランドの幼児教育に関する原稿

を寄せていただいたので、紹介したいと思う。（訳者）

☆ ☆ ☆

### I 幼稚園

ニュージーランドの幼稚園は、大きなプレイルーム、職員室、ロッカー室、倉庫、キッチンからなる平屋の建物である。幼児ひとりあたり約二・七平方メートルの室内遊び空間が必要とされている。ふつう、二名の教師が



四〇名（以内）の幼児を保育する。親たちは自発的に教師を援助する。すべての幼稚園に計画的に設置された広い園庭（舗装部分ならびに緑地）がある。

### (1) 幼稚園小史

最初の幼稚園は、私的機関によって一八八九年に設立された。児童援助会が幼稚園を設立した主たる機関であった。この会は、多くの子どもたちが貧困であったが故に幼稚園を設立した。多くの家庭にはあまりにも多くの子どもたちがいた。子どもたちは空腹で、汚なく、ぼろをまとい、粗悪な言葉を習っていた。児童援助会は、母親たちには援助が必要で、子どもたちも路頭に放任されていたとはいけない、と主張した。一九一〇年までには、すべての主な町に幼稚園が設けられた。

子どもたちは保護とともに教育が必要であった。最初の幼稚園は可能な限り教師を雇ったが、教師の数は少なかった。当時の教師は、英国においてフレイベルの幼児教育を学んだ者であった。特に、幼稚園が急速に設けら

れていた時期には、教師の数は充分ではなかった。

一九二〇年までに幼稚園は国内にすっかり広がっていた。一九三〇年から三五年までの経済不況時には、幼稚園を開いておくために、多くの教師が非常にわずかな俸給で働いた。人々は、その時期、非常に貧困であった。

一九三五年以降、人々の暮しも豊かになり、第Ⅱ次世界大戦の一九四五年以降は幼稚園は急速に増加し、六〇年に二〇七園、七〇年に三〇五園、今日は五三五園である。

幼稚園はいつも私的な機関によって設立されたのであるが、これらの機関は、一九〇四年以降、幼稚園協会と呼ばれている。この協会だけが幼稚園を設立し、政府の助成を受けることができる。全費用の約八十六パーセントが助成され、残りの約十四パーセントは幼稚園委員会によって支払われる。幼稚園は、子どもたちの保育料が無料でなければならない故に「フリーキンダーガルテン」と呼ばれている。多くの親が寄付をするけれども、費用は無料であるのである。また、いかなる宗教も幼稚

園では教えられてはならない。

〔訳注〕 ニュージーランドの幼稚園はすべてフリーキンダーガルテンである。個人的なキンダーガルテンは、ここでいう幼稚園には含まれず、社会福祉省管轄の児童保育センターのなかに保育所とともに含まれている。全国には地域ごとに入つの幼稚園協会があり、その連合が幼稚園連盟である。

## (2) 教育制度と幼稚園

一九六四年の教育法には、六歳から十五歳まですべての子どもに教育が与えられなければならないと述べられているが、実際には、約九十九パーセントの子どもたちが五歳の誕生日に小学校に入学している。幼児教育は義務教育ではないので、政府は教育を施す責任をもたないが、公的要求から、幼稚園を設立するために、政府をして幼稚園協会を援助させるに至った。

一九六四年の教育法は、幼稚園を管轄する規定をつくる法的力を政府に与え、幼稚園協会に幼稚園を運営する

ための助成金を交付する権限を政府に与えている。政府は幼稚園を管轄するために規定を作成したが、これらの規定が幼稚園規定と呼ばれているものである。

## (3) 幼稚園の概略

### ① 幼稚園のグレイド

幼稚園には各グレイドに応じて職員が置かれている。グレイドとはそこに何名の子どもたちがいるかを意味している。子どもたちの数によって教師の数が決まる。

第0グレイド——午前、午後の部、各幼児二十五名、

教師一名、助手一名。

第一グレイド——午前、午後の部、各幼児四〇名。主

任教師一名、教師一名。

第二グレイド——午前、午後の部、各幼児六〇名、主

任教師一名、教師二名。

〔訳注〕 第0ならびに第二グレイドは非常にわずかで、ほとんどの幼稚園が第一グレイドである。

すべての幼稚園は、週五日午前中に開かれ、週三日午後には異なった子どもたちのために開かれる。教師たちは、週一回の午後を設備準備にあて、さらに週一回の午後を親たちとともに働く。午前の部は、八時四十五分から始まり、十一時四十五分に終わる。午後の部は、十二時四十五分から三時十五分までである。幼稚園は年間三八〇半日、開かれなければならない。

## ②教師の資格

すべての教師は、幼稚園連盟の発行する免状を有していなければならず、他のいかなる資格も容認されない。

この免状は、幼稚園教師の要求される唯一かつの免許証である。これは、国立の教育大学において学習ならびに実習の二カ年の課程を終えたと得られるものであるが、政府あるいは教育大学によって与えられるものではなく、幼稚園協会の連合を代表する幼稚園連盟によって与えられるものである。

## ③給料ならびに助成金

規定は政府に対し、幼稚園への支払いを援助するために幼稚園協会に助成金を交付するように、また教師の給料を支払うように、法的権限を与えている。今日交付されている金額は、次のとおりである。

○教師の給料（平均） 一四、七〇〇ドル（日本円で年間約二八〇万円）

○半日（セッション）分の助成金 四ドル一〇セント

（約七八〇円）

○設備 政府は価格の三分の二を支払う

○建物 政府は新設建物価格の五分の四を支払い、土地を無料で提供する。

## ④管理

政府は幼稚園一園あたり年間二四二ドル（約五三、六〇〇円）を幼稚園協会に支払う。

## ⑤幼児の年齢

幼児は三歳から入園し、五歳で卒園する。特別の事情のある場合は、二歳半で入園することができる。

#### ⑥教師の養成

教師は国立の教育大学において養成されるが、規定は、教育大学に対する助成金、ならびに実習生への奨学金を支払うように政府に権限を与えている。

#### (4) プログラム

教師は公的なプログラムの手引をもっていない。教師はなにをなすかについて専門的に判断しなければならない。多くの幼稚園において遊びと活動のプログラムが常に重要で、今日のプログラムは自由な遊びと活動のプログラムである。

初期にはフレibelが、そしてその後一九二〇—三〇年には進歩主義教育者たちが強い影響をもっていた。一九三七年にスーザン・アイザックスがニュージーランドにやってきて、教師たちは注意深く子どもたちを観察す

べきであると主張した。教師の観察は教育の重要な部分であった。スーザン・アイザックスは、子どもたちの興味に基づいた活動的なプログラムは幼ない子どもたちに重要であると考えていたが、多くの教師が彼女の考え方に賛意を表わした。最近では、ブルーナーやピアジェの仕事が影響を与え、特にピアジェの仕事は多くの教師養成のプログラムの中心で、子どもの発達に関する教授の主たる源になっている。

〔訳注〕 スーザン・アイザックス (Susan Isaacs, 1855-

1936) は英国の著名な心理学者、進歩主義教育者で、保育学校の教育改革に強い影響を及ぼした。

多くの教師は、子どもの発達に関する知識に基づいてプログラムを組み、知的、身体的、社会的ならびに情緒的経験に対する子どもの要求に合うように努めている。

子どもは、何をするのか自身で選び、教師は、子どもたちのために広く変化に富んだ諸活動の準備をする。子どもたちがひとつの活動から他の活動へとたやすく動けるように、ふつう各コーナーが設けられている。典型

的な幼稚園のプログラムは次に掲げるすべての活動を準備しているだろう。

。室内

画架への描画

ブロックならびに組立て

絵本ならびにお話

パズル

練粉遊び

操作的活動(数珠つなぎ)

ままごとあるいは役割遊び

音楽

切り貼り(カラーシユ)

劇、想像遊び

。室外

砂遊び

ブランコ

水遊び

大工遊び

木登り

教師たちは、これらのプログラムが全面的な子どもに発達させると考えている。彼らは、身体的、知的、社会的ならびに情緒的なあらゆる面の発達を考慮しているのである。教師の役割は、年齢ならびに子どもの発達段階に適した興味ある諸活動を計画することである。教師は遊びを見守り、子どもたちが活動している間に援助した

り、指導のポイントを見積ったりして参加する。

こうしたプログラムは自由選択自由活動プログラムであるとよくいわれる。多くの教師は、子どもたちが降園する直前によく子どもたちを集めて、お話をしたり、歌を歌ったりする。

(5) 親の役割

幼稚園の諸活動において親たちは重要な役割を演じている。教師は親たちを教育プログラムのなかに包含しなければならぬ。親たちはしばしば教師を自発的に援助するが、これらの親はベアレントヘルパーと呼ばれている。ふつう、二、三名のベアレントヘルパーが日々の保育に参加している。

教師は週一回の午後、親たちといっしょに働くことを許されていて、その午後には子どもたちは幼稚園にこない。教師はまもなく入園する子どもたちの親たちを訪問したりする。教師たちはこうした親たちや入園前の子どもたちに喜んで会い、幼稚園やベアレントヘルパーの制度に

ついで説明する。親たちは、教師に幼稚園について多く質問するだろう。親たちといっしょに働くことによつて、教師たちは、子どもたちならびに子どもたちの成長、発達の望ましい姿について親たちを指導することを願っている。

どの親たちも幼稚園委員会に参加して、幼稚園の経費の支払いを援助するために働いてもよい。政府の助成金は多額であるが、幼稚園の望むすべての設備を購入するには不可能である。

募金に加えて、委員会は幼稚園の手入れをよくして室内外を整頓しておく。委員会は幼稚園を管轄する。協会が教師たちを雇用するが、政府が給料を支払う。協会は新しい幼稚園を設立する。協会は新設幼稚園の経費の五分の一を集めなければならない。残りの五分の四は政府が支払う。親たちは非常によく委員会に包含されているので、実際には親たちが幼稚園の管理、運営面を握っている。

## (6) 結び

ニュージーランドの幼稚園は日本の幼稚園より小規模のものである。教師一名につき幼児二〇名の割合である。教師たちは、子どもたちが学んでいくには自由選択活動プログラムが最善であると考えている。三、四歳の幼児が通園して、五歳の誕生日には小学校に入学する。幼稚園は幼稚園協会という私的な機関によって運営されている。親たちが幼稚園協会の会員である。多くの親たちが若干の自発的な寄付をすけれども、保育の費用は無料である。政府が幼稚園の経費の約八十六パーセントを支払う。

(続く)



## 木片をつないだ手の記憶

——子どもの思いを実現すること——

津 守 真

二月の暖い日、私は園庭にゆくと、五才児の部屋の前に、木工の机が出ていて、数人の子どもたちが木片をいじっていた。私が近づくと、M子がすっと私の傍にきた。瞬時に、私は娘たちが幼児だったころの柔い感触を思い出し、歩いてくる途中頭の中を占めていた抽象的な観念は消え去って、暖い陽ざしの中でこの子たちと楽しもうという思いに満たされた。M子は手に細長い木片と小さな四角い木片とを持っていて、この二つをつなぎ合わせるかと思っている。小さな手で釘を立てて金槌で打つのだがうまくいかない。

M子が二つの木片をつなぎ合わせたいと思っているのはわかるが、木片は分厚くて、子どもにはかなりむづかしい作業のように私には見えた。子どもを思いを何とか実現させてやりたいと思い、ボンドでつけたらと私は云う。すぐにM子は接着剤をとりについて試みるがうまくいかない。私は二つの木片を合わせて釘を打ち、ぐらぐらしない程度に金槌で打ちこんで、できるだけ子ども作業の分を残し、そのあとは、いろいろの角度から私の指で支え、M子は釘を打ちこむことができた。思ったように木片が接合されて満足な様子だった。短い時間の、

恐らく他人には気付かれないことだったが、M子にとって、心に思ったことを実現した重要な時だったと、そのとき私は自負した。しかし、多くの場合、その重要さは保育者には確かめるチャンスはない。そして間もなく、そのできごと、そのときの子どもの名前も忘れ去られる。

それからしばらく、私はこの日のことを思い出すこともなかった。二週間程たって、私は訪問客を案内して付属幼稚園にいった。部屋の中で大人同士話していると、私の手に触れるものがあり、下を向くと、M子が私を見上げてにっこり笑っていた。私はM子が声をかけるのでなく、叩くのもなく、私の手にさわったことに感激した。M子にとって私は、木片をつなぎ合わせるのを苦心して手伝った手の記憶であった。私は、二週間前の木工で、M子が心の思いを実現したのであることを確認できたように思った。

あのときM子が木片をつなぎ合わせようとしていたのは、でき上がった形から判断すれば、船をつくらうとしていたのかもしれない。あるいは、この子どもは二つのものをつなぎ合わせることに特別な関心を抱いていたのかもしれない。紙片をセロテープでつなげるのではなく、木片を釘で接合しようとするのは、手ごたえのあるソリッドに現実の物をつけ合わせることへの精神的な意味をもった関心かもしれない。しかしM子にとって釘で木片を貫くことはすこしむづかしかった。私が最初の部分を打ちこみ、子どもの力に合わせて角度を保つことによつてM子になし得られるものとなった。子どもが思ったことを実現するには、最初はおとなが手助けし、そのうちに独力で先をつくり上げるようになることが多い。木片を接合することがM子の精神にとつてどのような意味をもつものだったのか、その時だけしかつき合っていない私にはよくわからない。この瞬間に云えること

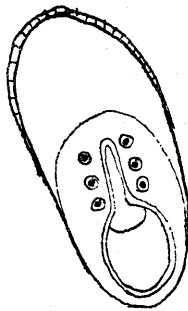


は、M子は二つの木片をつなぎ合わせたいと思って苦心しており、それには助けが必要なことである。そしてそれを実現させることのできた過程は、子どもと私との間で力をあわせた相互性の感覚としてとらえられる。

保育する者にとっては、その感覚が自分の保育のあかしであって、それ以上の証拠は必要とせず、保育の実践ではそこまでにとどまるのが普通である。何週間も経って、そのひとときが子どもに記憶されていたのを知られるのは、稀に起る恵まれた機会である。この時の私の体験は、その点で貴重であった。

もうひとつここで顕著なことがある。それは、M子が私の傍にきたとき、私の頭から幼児教育についての抽象的な考えは消えて、子どもと共に過すことをたのしんだことである。私の中にはいつもこの二つの傾向が住んでいる。おとなの中だけにいると前者の傾向になる。子どもと一緒にになると、瞬時に後者の気持になる。M子が二

つの木片をつなぎ合わせたいと心の底から思っていることが私に伝わったのは、二月にしては暖い陽光にさそわれて、子どもと共に過す時をたのしもうという気持に私の心が満たされていたからだと思う。構えた教育の場ではこういうわけにはいかないだろう。



## Tくんのこと

田中 三保子

Tくんは三才の男児である。入園当初から緊張もものおじもせず、にこにこ通ってきた。前年まで兄のお供で、園を見知っていたせいもあつたかも知れない。好奇心のかたまりといった表情であちこちを探索して回っていた。まだ新しい環境にも先生にも馴れずに戸惑っている子どもたちが、泣いたり、すねたり、うろうろしていたり、私から離れられなかつたりという中であつて、Tは実に生き生きとしてみえた。

“先生”にはあまり関心がないらしく、そばに寄ってくることも要求を出してきくこともなかつた。興味のおもむくままに遊ぶので、時々困つたことをしてくれるのだが、それは私の目の届かないところでのことが多かつた。水に特に執着し、いつときは

水遊びばかりしていた。水道の栓を一杯に回して勢いよく水を流す。流しの縁からとびはねた水が床に水たまりを作っている。蛇口を上に向けて“噴水”を楽しむ。室内で制止されると戸外の水道へ行つて同じことを始める。その遊び方のあまりの凄まじさに、子どもたちはびっくりして声もなく遠まきに見ていた。お手洗いの水道で遊んでしまうこともあつた。とめられると、ドアのところに行つて大きく開きボタンボタンといわせる。水を飲んでいと思えば、流しの前の棚やガラスに水を吹き出して水びたしにする。そういったことを、実に楽しそうににこにこしながらするのだつた。

私は、まだ馴じめずにいる子どもたちの世話に追われて、Tには振りまわされてばかりいた。Tが何

かしてからその行為に気づくことになる。どうしても

も止めたり怒ったりの対応になってしまう。できるだけ怒らないですむようにしたい。そのためにはTの行為が度を過ぎないうちに把握しなければならぬのだが、すぐ視界の外へ出ていってしまうTの姿をとらえ続けるのは実際には大変難しかった。水を使っている時には「このくらいにするとちょうどいいわね」と水流を弱めることを何度となく繰り返し、上手にしている時には誉めるなどもしてみた。誉めると得意そうな顔になる。ある時、外の水道で水をじゃあじゃあ流しているのに気づいた。あわてて近づくと、背中を向けていたはずのTがこちらにちょっととからだを向け水流を弱めながら言った。「このくらいでちょうどいいんだよね」「……」「ぼくいいこでしょ」ほんとね、えらいわと出かかったことばが喉にひっかかってしまった。Tにとって私はまだ信頼に足る人間ではないのだろう。大人の価値観を押しつける人間としてしか映っていないのか

もしれない。

一緒に遊ぶ機会を作るようにもしてみた。Tからは寄ってきてくれないので私の方が近づいていくことになる。その時、Tは床に座りこんで絵本を読んでいた。一人でたどたく字を追っていることはよくあったが(字はほとんど読める)、私がみんなと絵本を読んでいる時に輪に加わることはなかった。で、良い機会だと思った。通りがかりにTのそばに座りこんだ。Tの様子をみながら私は声を出して読んでみた。一ページは読ませてくれた。ほっとして二ページ目へすすむと、Tは絵本を持ったまますくと立ちあがった。視線は開いたページに落ちたままである。私に背を向けると、積木で遊んでいる子どもの向こうに腰を下しそのまま読み続けた。こんなふうにもいつも身をかざされてしまう。私のことを意識しているようではあるが、彼の世界の中にはなかなか踏みこませてもらえないのである。ところが、身のまわりの世話をやかれることは少

しも嫌がらない。むしろ喜んでさせてくれる。水遊びでびしょ濡れの衣類を着がえる時には全身で私に寄りかかってくる。ズボンなどはまるで二歳児にはかせているような気がするほどである。そこで、できるだけ世話をやかせてもらうことにした。食事の際には途中から立ってふらふらし始める。そばについて食べさせると嫌がらずに食べてくれる。歯磨きも水遊びに脱線してしまうので磨いてあげる。いまだに食事と歯磨きの世話までしているのは彼一人である。

子どもたちも馴れてそれなりに遊び始めると、衝突も自然おきてくる。Tもあちこちでトラブルをおこすようになった。通りしなに積木を壊していく。使っているおもちゃを持っていってしまう。おままごとに勝手にはいりこみ我が物顔に遊ぶというところもある。多い時には日に何度も「Tくんがー」という訴えを受けるようになった。相手によっては黙っていないからけんかになる。そうなると彼は相

手の髪の毛をひっぱった。相手は声もなく涙をぼろぼろこぼして泣いている。止めると「だってー」と泣いて足をバタバタさせた。「もうしないよー」とさけぶので、私が迷った揚句手を離すとまた相手につかみかかるともしばしばだった。「それはいやよ」「○○ちゃんがかわいそう」語気を強めて言うよ、「せんせいなんかあっちへいけ」「もうきこえないよ」ということが返ってきたりした。初めの頃は叱られると感じるだけでさーっとどこかに消えてしまったのだから、抗議するようになっただけでも大変な変化である。

お面作りがはやり出したが、Tは知らん顔である。ところが、ある日突然「うさぎのお面作って」と自分から言ったままいなくなってしまった。珍しいことなので大急ぎで作ってかぶせてあげると、もううさぎになりきっている。びんびんはねて犬の子と遊び出す。その日は一日お面をつけたまま過ごした。翌朝、お面をかぶってにこにこして登園

してきた。その次の日も。その日の帰り間際、他の子のぞうのお面をとって泣かしてしまった。Tが帰った後になって、ぞうのお面が欲しかったのではなかったかと気づいた。作っておいたお面を翌朝手渡すと、とても嬉しそうにかぶる。ぞうのお面は何日も続いた。今では、「あのね、ぼくね〇〇がほしいんだ」と言ってくれる。

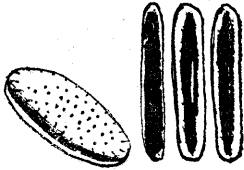
二学期も終わった。砂場で友だちに泥をかけたたり、一緒に遊んでくれないからとけんかをしたり、積木をけつとばして壊したり、そしてまだ「水遊び」もするけれども、ごっこ遊びなどでは誰よりもその気になって遊ぶし、けんかで泣いて私の胸に顔をうずめるようにもなってきた。

二学期の最後の一週間、Tは食中毒で休んだ。終業式の日、他の子ども達が帰った後で母親と一緒に来てもらった。誰もいない保育室でTと私と、そして母親は少し離れて、座った。こまに色を塗っても

らう。言われたことに黙って従ってくれる。母親の「小さいときから手のかからない子でした」ということばが、今更のように思い出された。本当にそんなのかもしれない。だけど、どうしてこんな幼い頃から場面によって自分を出し分けることができるのだろうか。「いい子」でいることにそんなに神経を使うのはよしまししょうよ、いつものあのきらきらした目のTくんになりましょよよ、そんな思いをこめてTに話しかけるが、彼は顔もあげずにただ手を動かしている。何を聞いても「うん」と小さな返事が返ってくるだけで、最後まで嘘のようにおとなしかった。「さようなら」と言うとやっと顔をあげちらっと私を見た。でもそれだけのことで、私の思いは伝わらなかったようであった。母に手をひかれて帰っていくちんまりとした後姿を、私は複雑な気持ちで見送った。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## エリクソンと幼児教育 (16)



仁科 弥生

### 同一性の形成 アメリカの場合(1)

今回は、アメリカにおける青年たちの同一性の形成について、エリクソンの見解を中心にして話をすすめてゆき、

エリクソンによれば、アメリカ人の同一性は次のように要約される。アメリカの集団同一性は、開放的な移民の道を排他的な伝統の島というような、相矛盾する両極性をはらむ性質で特徴づけられる。その他の両極性として、たとえば積極的な国際主義と挑戦的な孤立主義、騒々しい競争と自己抹殺的な協力などをあげることができ。そして、このような両極性で示される二者択一に個人は直面するが、彼が慎重に自律的選択をなんらかの私たちで暫定的なものとして保ちつづけることができるかぎり、その集団同一性が彼の自我同一性を支えることになる。

たとえば、定住生活と移住生活という二つの対照的な極がある。つまり一方には、村や町に根をおろし、人々

は地域社会の発展に努力するという生活がある。しかし他方には、「隣家の煙突の煙が見えたら、移動の時である」というスローガンを生みだした世界がある。しかし、定住者はそこを動かすと言われるのを望まないし、移住者は移動を続けるように命じられるのを好まない。

彼らはどちらを選ぶかはもっとも私的で個人的な決断によるべきであると考えている。つまり、どこに留まっていようと、どこへ行こうとしていようと、いつでも、自分の意志で、そこを立ち去ることも、反対の方向へ行くこともできるといふ保証があつてはじめて、その集団同一性は個人の自我同一性を支持することになる。したがつて、潜在的な可能性としての正反対の選択の機会が絶たれると、彼らは不安におそわれ、彼らの同一性は危機にさらされることになるという。

さて、アメリカ人の同一性の一つに、自律と自発性の同一性がある。アメリカの大陸の広大さや、その自然のきびしさや野性の誘惑などがそれを作りだしたとエリックソンはみる。すなわち、アメリカの開拓時代において、

男たちは新しい辺境へと旅立ち、自分の腕一本で成功した。そこに「どこへでも行き、どんなことでもする」という独立独歩の男の同一性が生まれた。移民の娘たちは、幼い子どもの頃に祖国では学ばなかった行動の規範を新しく身につける努力をした。こうして、自ら形成したパーソナリティをもった女性（つまり、男性の理想にもとづいて作られた女性ではない）が、独立独歩の男に対応するものとして出来上った。そうして、歴史的には、明確に定義されすぎた過去は捨て去られ、不確実な未来が強く求められた。地理的には、移住することが常に存在する事実であつた。社会的には、運を天にまかせて事を行なうところに好機があり、社会的移動のルートを最大限利用するところに幸運があると信じられるようになった。

たしかに、このような建国初期の精神が、現代においても、アメリカ青年の基本的性格を規定しており、また青年には、たえず独立への、大人になるための圧力が働いているといえる。しかし、その建国当時の前提条件そ

のものが、独立の方法でその国の発展はもとより、国民の同一性の発達を複雑なものにする。たとえばアメリカ史におけるあの両極性に象徴される二律背反が、現代の青年たちを情緒的、かつ政治的短絡傾向に走らせている。また、丸太小屋の生活から超近代的な高層建築の世界へと急速な変貌をとげる過程で、二代、三代にわたる世代の生活はそのような急激な変化に適應をせまられた。子どもたちは成長の過程でしばしば価値観の不連続を経験することとなった。彼らはさまざまな同一性を何とか調和させようと努力するが、これらの同一性の変動はあまりにも急速であり、あまりにも鋭く対立しあっていた。こうして、今日、大人や子どもたちの患者の中に同一性の喪失が顕在化するようになったとエリクソンは分析している。

次に、その同一性の喪失についての考察の中で、エリクソンが指摘したいいくつかの問題に触れてみたい。

アメリカの精神医学関係者たちの間に、彼らの患者の背後には、必ず冷淡で、支配的な「母親」が存在すると

して、そのような母親の「拒否的態度」が情緒障害の一つの原因であると考える傾向がある。これに対して、エリクソンは、そのような母親像は、親としていくつかの致命的な矛盾をかかえている母親が示すさまざまな特性の合成図であって、そのような特性のすべてが一人の現実の母親の中に存在しているわけではないという。また、どんな女性もそのような母親になりたいと意識的に望んでいるわけでもない、彼は女性を弁護している。そして、さらにその「母親像」の起源が、実は、さまざまな国からもち込まれた多くの伝統を基礎にして、女たちが新しい共通の伝統を發展させ、また、それを土台にして家庭生活の様式を築き、子どもたちを教育しなければならなかったというアメリカ建国の歴史の中にあることを明らかにしたのである。

すなわち、自由を新天地に求めてやってきた男たちは、新しい仕事を次々に求め、それに挑戦することに熱中していた。したがって、定住生活の習慣を確立させることが女たちの責務であった。そして、きびしい自然を



切り開いて築いた苦しい経済状態の中で、彼女たちは生活に繊細なやさしさを与えたのであった。

また、彼女たちには、堅苦しい定住生活とたえず変化する移住生活という両極性に直面することになる未来にそなえて、子どもたちを教育するという仕事もあった。

すなわち、辺境の魅力や移動への誘惑をしりぞける決意をもち、しかも一旦、辺境へ出かけなければならなくなると、同じように強い決意で出かける勇気をもった人間に子どもを育てる必要があった。そのため、保護的な母性主義が未来の辺境開拓者を軟弱な人間にしてしまうことを恐れて、女たちは、アングロ・サクソン流の育児法をさらに発達させて、きびしく「拒否的」な態度をとるようになったのである。したがって、それは、建国初期のアメリカの母親たちが、無意識的な適応の仕方であり、この大陸の歴史的状況に反応した結果の所産であり、それはとりもなおさず、かつての文化的美徳であったと解すべきであるとエリクソンはいう。

また、独立独歩の男や、自力で作らあげたパーソナリ

ティの女というイメージにびったりするような人々には保護的な母親の愛情はそれほど必要ではなかったともいう。それに、実際に子どもにそのような母親の愛情を受けた人々は、後には自らそれと縁を切らねばならなかった。或は、拒否的な母親が存在しなかった場合はそれをでっち上げねばならなかったほどである。なぜなら、アメリカの民話の一つ、ジョン・ヘンリー誕生の物語の中のジョンが、途方もない食欲を阻止されて、大きな不平を抱いて人生を始める話に象徴されるように、アメリカでは「不平不満をもつこと」が歴史的にきわめて重要なことであり、強く激しく変化する世の中で、自分の足で立つためには自分自身の苛立ちで自分を支えていかなければならないからである。

エリクソンは、母親の拒否的傾向を一層助長した清教徒主義の影響にも注目している。清教徒主義は、もともと人間の強い個性や欲望を抑制する価値体系であったが、アメリカ史の短い流れの中で、住民の移動や、無限の移民政策、産業化、都市化などの影響をまともにう

けて、自衛上守勢をとらざるをえなくなり、それはますます剛直なものになった。そして、血の気の多い人々の肉欲を抑えたばかりでなく、夫婦関係も含めて官能性を罪悪視するようになり、さらに育児やしつけの領域にまでその冷たさを拡げていったのである。その結果、母子の間の情緒的緊張はますます高まった。子どもたちは母親から肉体的感覚の十分な満足を与えられなかったばかりでなく、官能性の良い面を愛することを学ぶこともできなかつた。こうして人生への不信を学ぶことになつたとエリクソンは説明している。

その上、どんな独裁にも屈服しないという自由の觀念に取りつかれた男たちは、自由の身に生まれた息子、子の役割を演じつづけた。そして、家庭や教育の場における支配者としての地位と責任を放棄し、女たちに母親であり、同時に父親であることを強制したのであつた。アメリカの母親中心主義の背景には、このような事情もあつたのである。そして、エリクソンは、この問題と関連つけて、アメリカの父と子の友愛的関係をも論じている。

すなわち、そのような夫に失望した母親が抱いた男性の理想像は、彼女の父親、つまり強くて、精神的に働く祖父であつた。それを母親が息子に無意識に伝えるので、少年の抱く男性の理想像は日常生活で一緒に暮らす父親に結びつくことは稀であるという。その結果、幼い日のエディプスのイメージ、すなわち圧倒的に大きく偉大な父親であり、母親を所有する男であり、息子が競い、打ち負かさねばならない相手というイメージは、祖父の神話と結びついたものとなる。したがって、父親は比較的息子の憤りの矢面に立つことから免れる。そして兄のような存在になるという。

そればかりではない。アメリカのような移民の国では、子どもたちは常にその親たちよりも新しい社会へのすぐれた適応力をもっているので、親を軽視する風潮が生まれやすい。また建国以来わずか二〇〇年という短い歴史の中で世界最強の国家へと発展したその速度と技術革新に対して、子どもたちの方がより大きな親和力をもっている。親たちはその進歩に追いつくことができなく

て、むしろ息子たちからそれを学ばねばならなかった。

このような状況のもとでは、父親は子どもの友人とはなるが、決して専制君主にはなりえなかったのである。ここにも、我妻洋も指摘する現代のアメリカの青年にみられる傾向、つまり、彼らは父親を自分たちと平等な立場にある存在とみなし、「仲間」同士として意見を交し、行動をとにもする傾向が育つ土壌があったのである。また、このような反権威主義が、家庭のみならず、広く、政治的、社会的態度として発達し、これがアメリカの民主主義の心理的基盤となっているともいわれている。ここで思い出されるのが、最近、報道されたアメリカの民主党のエドワード・ケネディ上院議員の八四年の大統領選不出馬の話である。彼は「家族たちの反対」を理由に不出馬を見送ることを公式表明している。その理由について、勝算が微妙であることからの決断であろうと取りざたされているが、勿論、ここでことの真相を問題にするつもりはない。ただ彼の場合、「家族の反対」といっても、夫人とは別居中であり、その発表の席に同席した家

族は子どもたちであった。このように「子どもたちの反対」を、たとえ人々がそれで納得するはずがないにしても、少なくとも表向き理由としてあげる彼の意識の中に私はきわめてアメリカ的な父親のポーズを読みとり、興味深く感じた。

さらに、エリクソンは、臨床経験を通して、次のような注目すべきアメリカ人の傾向を見いだしている。すなわち、情緒障害をきたしている人々には、母親に捨てられたという心の傷があり、無言の不満があることである。また、正常な男子についても、彼らを精神分析してみると、彼らは心の奥底では、自分を挫折させたことについて母親を責めているということである。その場合、エディプス・コンプレックスにみられる型通りの母親をめぐる父との敵対というあの特定の意識は殆どみられない。そして、この手法でさらに深く探っていくと、必ずその根底に、決定的な自責の念があるという。それは、自分は独立しようとしたあまりに、母親を捨てた子どもであったという自責であるという。

この分析は、母を捨てたと確信したときに、はじめて子どもは自立に近づくことができることを示しており、また、単に不満としてではなく、それを子どもの側の罪として自覚するところに「個」の確立があり、成長があることを示唆している。つまり、その罪悪感をいわばこの支点にして、社会の中で生きていかなばならぬことの自覚にすすむ自我の発達の筋道がそこに明らかにされていると思う。

それにしても、母を捨てることによってかち取っていく自立の道はけわしく、またそれには深い罪悪感がつきまとうのである。その心情を端的に表わしたのがカウボーイのうたう歌であるとエリックソンはいう。彼らは、追われる仔牛と同じように、帰っていく道がないということを一貫して歌っているのである。

お前には父親もいない、母親もいない、  
お前がはじめて一人できまよい出たとき  
お前が彼らを見捨ててきたんだよ、  
お前には妹もいない、弟もいない、

まるでカウボーイと同じだよ、  
家から遠く離れてしまつて。

(『幼児期と社会』)

ここには「愛情に対する信頼を否定し、信頼の必要性を否定する」という、かたくなまでのパラドックスが表現されている。したがって、それは人間の独立の優しくもせつない宣言となる。」とエリックソンは述べている。また同時に、彼は、「拒否的な母親」の存在を必要とした、「ある程度の喪失と孤独に耐えることを学ぶべきであり、女々しい男にみえることは危険なことである」という考え方に、このように深い歴史的根拠があることも明らかにしたのである。

ところで、この喪失とパーソナリティの発達の問題を、江藤淳は彼の『成熟と喪失——“母”の崩壊——』(一九六七年)の中で文学的な課題として問うている。そして、そのあとがきの中で、その視点の設定にエリックソンの『幼児期と社会』が深くかかわっていることを彼自身述べている。

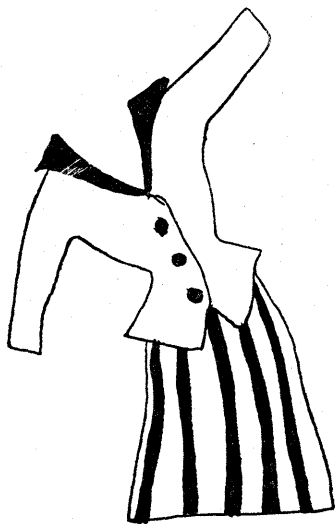
その評論の中で、江藤は、エリクソンのとらえたアメリカの母子関係の対極にあるものとして、日本の母親と息子の肉感的なほどに密接な関係をあげている。そして日本の母と子の密着ぶりとアメリカの母子の疎隔ぶりの間には、ある本質的な文化の相違があると指摘している。つまり、カウボーイたちは、父性原理の思想をいだいてヨーロッパから新大陸へ渡ってきた者たちの子孫である。母性原理に支配されるわれわれ農耕社会の母子関係は当然アメリカのそれとは異なるものであるというのである。彼によれば、日本の母親は、わが身の分身である息子が自分とはちがった存在になっていくことに耐えられない。そして成長して自分から離れていく息子に対して、裏切られたと感じて、うらみを抱く。「このことは逆にいえば日本人の生活全般に及ぶ母親の影響の強さを物語るものであろう。これは勿論、「家」の中の母親の位置に由来しているという点で、農民的、定住者のな感情とすべきものである。息子は「家」の中で、先祖伝来の田畑を守って生きなければならぬ。彼は放

浪するカウボーイのように孤独であってはならず、母に對するように密接に血縁とつながり、母に對するような濃い情緒で大地に結びついていなければならない。」と日本の母と息子の粘着性の高い関係を文化的な背景から説明している。そして彼は、日本の「近代化」がそれに及ぼした影響に言及している。すなわち、「近代化」は、学校教育制度の確立というかたちで社会階層の間の壁をとりはらい、「教育」によって「出世」する道を開いた。つまりよい「教育」をうけることが息子をほぼ確実に上の階層を移すことを可能にした。したがって、日本の「近代」は学校教育制度を導入することによって、男たちの心の中にいわば「フロンティア」を開いたのであった。そして母親たちは息子をこの「フロンティア」のなかに旅立たせなければならなくなった。江藤はここに教育熱心な母親の起源があると論じている。

しかし、一方、母親には、息子をいい学校に入れようとする努力が、息子を自分から離れさせ、結局、彼女と息子との肉感的な結びつきが破壊されることになるとい

う恐れがあった。この危機感が、母親の息子への心の傾斜に拍車をかけることになったという。また、息子は息子で、母親との粘着した結びつきを壊すまいとする。或は母親の秘められた願望を先どりして、学校を落第ばかりする。こうして母親の表向きの期待を裏切ることによって、母親のひそかな願望に協力しているといっても過言ではないという。つまり、「母親が『成熟』を呪詛している」とすれば、息子はいつまでも幼児のままでありたいと願っている。」したがって、そこには、「人が生きることは絶えざる喪失の過程を歩むことであり、それは一つの成熟の過程でもある」が、農耕文化の中で生きてきた日本人は「近代化」のために「母なる大地」が侵犯されつづけているにもかかわらず、なかなか自立した個人になることができないでいるのが日本の現状であるとすると彼の鋭い認識がある。そして、喪失を確認するところに成熟があり、したがって母と息子の肉感的な結びつきに頼っているかぎり、母にも子にも成熟はないという彼の見解は、今日よく指摘される日本の青少年の自我の未熟

さの原因の一つを照射したものととして注目にあたいすると思われる。  
(津田塾大学)



〔史料紹介〕

『邦訳 日葡辞書』 ⑫

——わが国中世の児童文化史研究によせて——

M・M・M

ウマレダチ (生まれ立ち)

生まれたばかり、あるいは、生まれるとすぐ。

(例)ウマレダチニ ヤガテ ヒトニ ヤシナワセタ (生まれ立ちに聽て人に養はせた) 生まれるとすぐに、私はその子を養育するようにと他人にやった。

(例)ウマレダチノ コ (生まれ立ちの子) 生まれたばかりの乳児。

ウマレガエリ (生まれ返り)

親の天性より劣って生まれること、または、親の性質に似ないこと。

(例)ウマレガエリニ ナッタ (生まれ返りになった) 人や動物の子が親に劣っている。

ウマレマシ、ス、イタ (生まれ増し、す、いた)

他の人より優秀な、すなわち、まさった人として生まれる。たとえば、父にまさった子、などのように。

ウマレツキ、ク、イタ (生まれ付き、く、いた)

生まれる、または、何か先天的なものをもつ。

(例)ウマレツイタ カタギヂヤ (生まれ付いた形骸ぢや) それは生来の、すなわち、もって生まれた性癖である。

(例)ドンニ、リコンニ ウマレツク (鈍に、または、利根に生まれ付く) 先天的な愚か者として、または、賢い人として生まれる。

ウマレツキ (生まれ付き)

天性、すなわち、持ちまへの性質。

ウマレヲチ、ツル、チタ (生まれ落ち、つる、ちた)

生まれる。母の胎内から生まれ出てすぐの時を言い表わす語。

ウマレヲトリ、ル、ッタ (生まれ劣り、る、った)

他の人よりも劣って生まれる、または、親や祖先よりも劣った天性をもって生まれる。

ウマズメ (石女)

孕まない女、すなわち、子どもを産まない女。

ウミ、ム、ンダ (産み、む、んだ)

出産する。

(例) コヲ ウム (子を産む) 息子か娘かを産む。

ウミイダシ、ス、イタ (産み出だし、す、いた)

分娩する、子を産み出す。

ウミナガシ、ス、イタ (産み流し、す、いた)

分娩の時期が来る前に死児を墮胎する。または流産する。

ウミヲキ、ク、イタ (産み置き、く、いた)

(例) コヲ ウミヲク (子を産み置く) 子を産み遣す。

ウナイコ (うなぬ子)

十歳以前の子ども。

ヲビナラシ (帯直し)

紐落しに同じ。九歳までの子どもは帯を背後に結ぶ習わ

しであるが、この結び方をやめること。

ヲチ、ヲチノヒト (お乳、または、お乳の人)

子どもを養育する乳母。

ヲック (負課)

支払うべきものとして負っている負債。

(例) ヲックワノ カタニ コドモガ トラレタ (負課のか

たに子どもが取られた) あの人(は)借金のかたに子どもを取

られた。

ヲクレガミ (後れ髪)

解けはつれて、髪束の外に垂れ下がっている頭髮。主として子どもの髪について言う。

ヲドリ (踊)

幼児の頭のひよめき。

ヲイタチ、ツ、ッタ (生い立ち、つ、った)

幼児が成長する、あるいは、大きくなる。

ヲモイゴ (思ひ子)

愛されている子ども、または、いとしく、かわいい子ども。

ヲナゴムスビ (女結び)

この名で呼ばれる結び目の一種、すなわち、輪結び。ただし本来の語はメナゴムスビ (女兒結び) である。

ヲンアイ (恩愛)

親子間なり、夫婦間なりの情愛や愛情。

(例) ヲンアイノ アワレ、オモイ (恩愛のあはれ、または、

思ひ) 親と子の間などにおける憐れみの情、あるいは、愛情。

ヲンコ (恩顧)

過去の恩恵、すなわち、誰かの親や先祖によって施された

恩恵。

ヲニゴ (鬼子)

長い髪の毛に長い爪、それにまた、犬や猪の持つような

歯、すなわち牙が生えて、怪物か野蠻人かのような姿で生

まれる赤子。



ヲロシ、ス、イタ(下ろし、す、いた)

(例) コヲ ヲロス(子を下ろす) 婦人がその時期でない時に胎児を殺したりなどして出す。

ヲサナガマシイ、または、ワラベラシイ(幼がましい、または、童らしい)

子どもらしい(こと)。

ヲサナゴ(幼子)

六歳ないし七歳までの子ども。

ヲサナイ(幼い)

子どもらしい、または、幼年らしい(こと)。

ヲサナシイ(童しい)

子どもらしい(こと)。

(例) ヲサナシイ コトヲ イフ(幼しい事を言ふ) 子どもらしい事を言う。

ヲソイガキ(襲い書き)

ある地方で用いられる語。学校の児童がするように、字を習う時に、上からなぞって書くこと。

ヲトナゴト(大人事)

天然痘。

ヲトツワリ(弟悪阻)

母親が次の子を孕んでいるのがもとで起こる、乳飲み子の病氣。

(例) ヲトツワリヲ スル ワランベノ チヲノミカヌル

(弟悪阻をする童の乳を飲み兼ねる) この病氣にかかっている乳飲み子が、乳を飲むことができない。

ヲウワラワまたヲウワラワナ(大童、または大童な)

髪はばらばらに解け、着物はしまりなくはだけなどして、身なりの乱れている(こと)。

ヲシコロシ、ス、イタ(押し殺し、す、いた)

生まれるとすぐその子を殺す無情な母親がするように、手でおしつぶしたり、窒息させたりして人を殺す。

ヲヤ(親)

父、母。ただし、もっと一般的には父の意に用いられる。

ヲヤカタ(親方)

兄に同じ。年上の兄弟。また、ある人が頼みとしている相手の人、または、奉公している相手の人、または、何かの職を習っている相手の人。

ウシロヒボ(後紐)

子どもの身体のうしろで結ぶ紐。

(例) ウシロヒボノ ワラベ(後ろ紐の意) まだ身体のうしろで紐を結びつけている子ども。

ウエワラワ(上童)

貴人に仕えて奥向きの清潔な用事をする、まだ年のいかない女の子。文書語。

秋の暮に、あちらこちらでとってきた木の実が、もうかさかさ枯れた木の葉と一緒に、私の机の上に飾ってある。ぬめりをもって赤く光ったとべらの実、長い杓の先に赤い実が揺れているそよごの実、大きな黒紫色の犬つげのまるい実、まつぼっくりの形をした夜叉ぶしの実、

てるてる坊主の並んだように見えるくさぎの黒い実、月桂樹の名のわりにはささやかな黄色い実、中でも豪華なのはいぎりの赤い実の房である。赤や紫、黒とそれぞれに異った木の実を見ていると、一年の終りの収穫の個性の違いを思わせる。いづれも優劣をきめがたい。中にはほんとに小さな目立たない実もあるし、また、人目をひく豪華なものもある。でも、よく見ていると、どれも美しく、慕わしい。

三月をすぎ、四月になると、これらの木々の花が咲きはじめる。花の形は、木の実の形や色と、どうしてこんなに似てもつかないのだろう。花は小さくて目立たないのに、木の実は立派なものもある。またその逆もある。倉橋惣三の「育ての心」の四月という題の短文、「花が咲いている。どんなに花自ら楽しいであろう。その、花自らの喜びを喜びとし、……」とのべている。小さな花も、それぞれに、花自らの喜びがあるのだろうと、あらためて気付かされる。四月に、幼稚園に入園してくる、子どもたちそれぞれに、新しい生活への前向きな、張り切った心がある。自分から何かやろうとしている。小さな意気込みを、とざしてしまふのは、第一目の保育である。

今月号は、いつも問題になることで、習慣をかえることのむづかしい、入園式のことを、またとり上げることにした。小さな花も、満開に咲かなければ、実を結ぶに至らない。花と実と、それぞれに。

(津守真)

### 幼児の教育 第八十二巻 第四号

四月号 ㊦

定価三〇〇円

昭和五十八年 三月二十五日 印刷

昭和五十八年 四月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 発行人 津 守 真

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一―九六四〇番

●本誌御講読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

\*万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

# 好評発売中

## 幼児を のほす 指導のポイントシリーズ(全10巻)

微妙で大切な保育のポイントを、  
ろを、がっちり」と読みとろつ。

子どもたちに豊かな保育をと心をくだいておられる先生や、子どもがよくわからない、きつかけがつかめないと悩んでおられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

- ① 保育の視点—ここがポイント 海 卓子・著
- ② 指導計画—ここがポイント 高杉自子・著
- ③ 絵画の指導—ここがポイント 林 健造・著
- ④ 音楽の指導—ここがポイント 早川史郎・著
- ⑤ 体育の指導—ここがポイント 三宅邦夫・著
- ⑥ 自然の指導—ここがポイント 小山孝子・著
- ⑦ ことばの指導—ここがポイント 阿部明子・著
- ⑧ ごっこ遊び—ここがポイント 笠間典子・著
- ⑨ 園行事—ここがポイント 仲田あつ子・著
- ⑩ 母親対応—ここがポイント 本吉圓子・著

B6判・セットケース入り・平均208頁・セット定価(9,600円)

## 子どもの遊び(全6巻)

● 全国学校図書館協議会選定図書

0歳から三歳(3巻セット)

土屋多喜栄 丸尾ひさ  
本吉圓子 田中文字子 著

三歳から六歳(3巻セット)

本吉圓子 前 典子 笠間典美  
田中文字子 矢作邦子 著

この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。

遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかわり方をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。

セットケース入り・セット定価 各3,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

好評発売中

## 保育の再点検(全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きっと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

---

① 望ましい生活習慣

---

② 望ましい集団づくり

---

③ 望ましい当番活動

---

④ 望ましい行事と生活

---

⑤ 望ましい言葉の指導

---

A5判・ケース入り・各208頁・セット定価 6,750円

---

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館